



未来のために、いま選ぼう。

高梁川流域連携中枢都市圏事業

高梁川流域学校

第5期年次報告書

2020年3月

一般社団法人 高梁川流域学校



第五期を終え、あらためて「高梁川流域学校」とは

高梁川流域学校は、五年間、活動を続けてきました。

高梁川流域とは、一部の支流をのぞいて、本流も支流も備中域内で完結する——これは、全国でも珍しい自然と人為の複合関係です。

それが、古代の律令制から近世の幕藩制まで長きにわたって続き、この「流域一円」(備中一円)ならではの文化を醸成してきました。たとえば、氏神より古い産土荒神の信仰と荒神神楽、砂鉄の道・牛の道・三斎市をつなぐ道と交易文化など。川沿いだけでなく、その源流部をつなぐ高原上にも人びとの暮らしが広がりました。そして、小盆地や小台地ごとには、それぞれ小異ながらも大同な生活文化が育まれてきました。

歴史を通じては、安定した暮らしやすいところ、といえるでしょう。ただ、それゆえか、備中人の気質は、競争心に乏しく、群れもなしにくい、ともいわれます。たとえば、現在の東京での同郷人の集まりも活発とはいいたいものがあります。

一方で、近・現代の変化もあります。それは、備中地方にかぎったことではなく、全国的にみても中央集権化の進みにあわせてのことでした。とくに、昭和後半の経済の高度成長期における歴史上でもっとも急速にして大規模な生活革命は、「地方の文化を崩壊させるほどの変化・変容でした。

それを批判するわけではありません。しかし、ならばこそ、長い歴史のなかで培ってきた地方の文化を見直しておく、消えゆくものと伝えるべきものを語りあつておくことが必要となるでしょう。この場合の文化とは、もちろん芸術的なものも含みますが、その土地の風土と生活に根ざして多くの人が共有した民俗文化に重きがあります。平易には、備中人ならではの有形・無形の「クセ」のようなもの、といいかえてもよいでしょう。

高梁川流域学校の活動は、十以上のプロジェクトから成っていますが、総じては、以上のことへの「備中人としてのアイデンティティ」を実践を通じて認めあうことにあります。それを、次世代にも伝えることにあります。が、まだ道半ばです。第六期以降も、その模索を続けていきたいと思えます。

皆さまの、いつそのご理解とご協力をお願いするしだいです。

高梁川流域学校校長 神崎宣武



神崎 宣武(かんざきのりたけ)

1944年、岡山県生まれ。民俗学者。武蔵野美術大学在学中より宮本常一に師事。以後、国内外の民俗調査・研究に従事。国土審議会専門委員、文化審議会委員、公益財団法人伝統文化活性化国民協会理事などを歴任し、現在、旅の文化研究所所長、公益財団法人伊勢文化会議所五十鈴塾塾長、岡山県文化振興審議会委員などをつとめる。岡山県宇佐八幡神社宮司でもある。

近著に、『「おじぎ」の日本文化』(角川ソフィア文庫)、『大和屋物語—大阪ミナミの花街民俗史』(岩波書店)、『聞書き 遊廓成駒屋』(ちくま文庫)、『「うつわ」を食らう—日本人と食事の文化』(吉川弘文館)、『近鉄中興の祖 佐伯勇の生涯』(創元社)、『社をもたない神々』(角川選書)、『吉備』の歴史と伝統文化 備中志塾講義録』(吉備人出版)などがある。



高梁川流域学校

目次

ご挨拶

- 2 一般社団法人高梁川流域学校 校長 神崎 宣武
- 4 高梁川流域学校について

これまでとこれから

- 8 5年間の成果
- 10 今後の展望（寄稿）

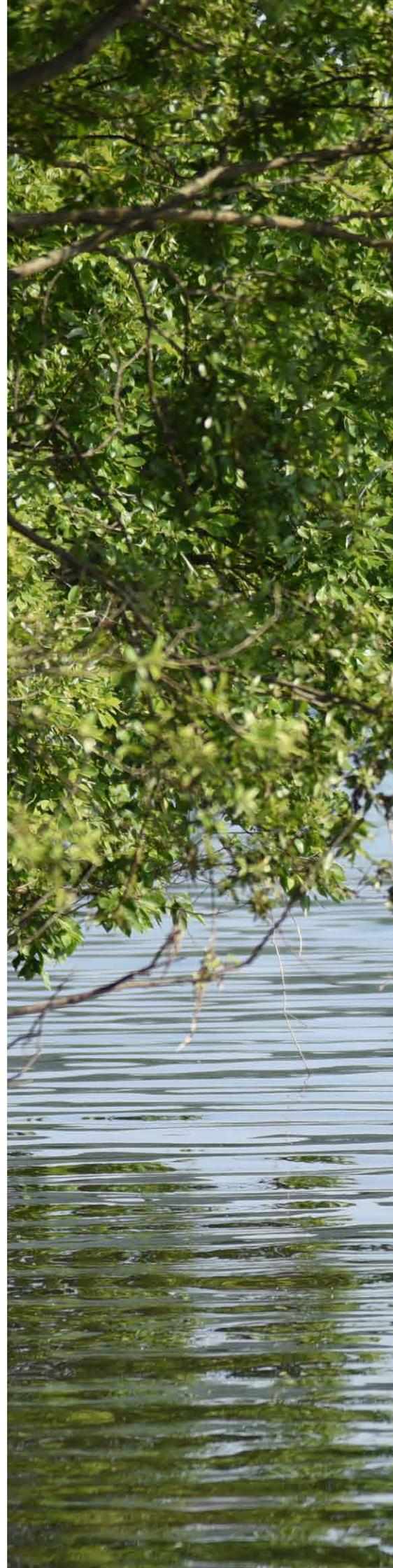
第5期 事業報告

- 18 高梁川ミーティング2020
- 20 備中志塾
- 22 地域社会人養成講座
- 23 学生インターンシップ
- 24 水島コンビナートの進化
- 26 エリアミーティング（笠岡）
- 27 エリアミーティング（水島）
- 28 エリアミーティング（早島・倉敷）
- 29 高梁川トレイル
- 30 こども造形ひろば
- 31 Forestry Field Camp
- 32 MASCによるドローン活用事業
- 34 高校生によるまちの匠への「聞き書き」
- 36 ママぱれっと
- 38 高梁川マルシェ

第6期以降ビジョン

- 40 高梁川流域学校～2月19日の鼎談～
- 44 第6期以降ビジョン

- 48 111人委員会
- 高梁川流域学校「111人委員会」募集趣意書
- 49 寄付金・助成金のお礼
組織概要





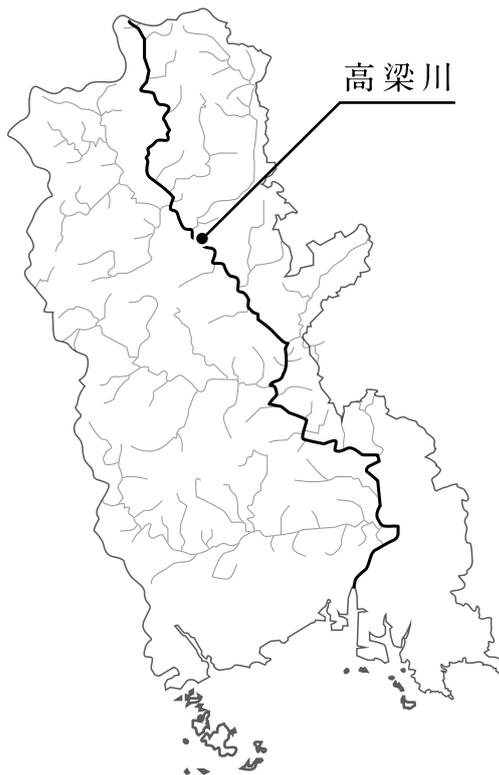
風土を
学び
次世代に
繋ぐ

未来を
創る
仕事を
興す

先人に
学び
匠に習う

節季を
感じ
旬を
味わう

自然を
楽しみ
多様性を
知る



高梁川流域圏

- 新見市
- 高梁市
- 総社市
- 早島町
- 倉敷市
- 矢掛町
- 井原市
- 浅口市
- 里庄町
- 笠岡市

高梁川流域学校について

高梁川流域学校は、大学・企業・地域団体・自治体などと連携し、流域の自然や歴史・文化、及び産業を「地域教育」の教材として、持続的に提供することを目的としています。

これらの活動により、「学校教育」「家庭教育」「企業内教育」を補完し、多様な世代の郷土愛・地域への誇りを醸成するプログラムを、当団体及び高梁川流域の各地で活動する連携団体とのネットワークにより、実施しています。

持続可能な開発目標 (SDGs) とは

- 1 2015年9月、国連総会で採択
- 2 2030年の世界目標
- 3 17のゴールと169のターゲットで構成
- 4 貧困や教育、気候変動などの幅広い課題が網羅されている
- 5 先進国も途上国も、すべての国が関わり「誰ひとり取り残さない」

国際社会は、MDGsを開発分野の羅針盤として、15年間で一定の成果を上げました。一方で、教育、母子保健、衛生といった未達成の目標や、サハラ以南のアフリカなど一部地域での目標達成の遅れといった課題が残されました。また、深刻さを増す環境汚染や気候変動への対策、頻発する自然災害への対応といった新たな課題が生じたほか、民間企業やNGOなどの開発に関わる主体の多様化など、MDGsの策定時から、開発をめぐる国際的な環境が大きく変化しました。

2030アジェンダは、こうした状況に取り組むべく、相互に密接に関連した17の目標と169のターゲットから成る「持続可能な開発目標 (SDGs)」を掲げています。



高梁川流域学校の取り組みとSDGsとの関係

「自然を楽しみ多様性を知る」



高梁川ミーティング 2020

「節季を感じ旬を味わう」



備中志塾

高校生等の地域社会人養成講座

「先人に学び匠に習う」



高梁川トレイル

SAVE JAPAN プロジェクト

「未来を創る仕事を興す」



高梁川マルシェ

森林保全事業

「風土を学び次世代に繋ぐ」



こども造形ひろば

ドローンを活用した物流事業

高校生による『聞き書き』

ママぱれっと

高梁川流域エリアミーティング

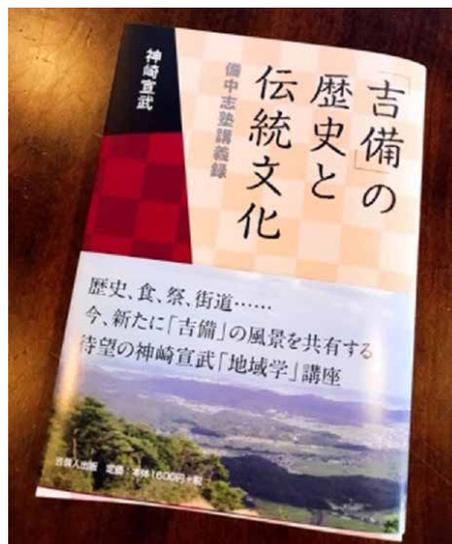


5年間の成果と今後の展望

5年間の成果



●年度別事業報告書



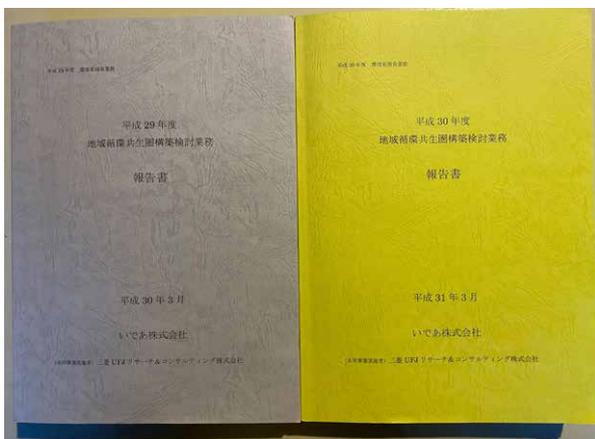
●神崎宣武先生
『吉備』の歴史と伝統文化』の出版



●備北、吉備、玉島、水島の4信用金庫との「高梁川流域圏の持続的な発展に向けた連携に関する包括協定」の締結(2016年12月)
定期預金「高梁川の恵み」を募集。



●高梁川トレイル読本



●環境省「地域循環共生圏構築検討業務」
実証地域団体として活動(平成29～30年)



●五年間で実施されたイベントチラシの一部

■ 行事・イベント等の実績

年度		事業数	参加者数
第1期	H27	11事業(延べ25回)	761人
第2期	H28	10事業(延べ30回)	639人
第3期	H29	13事業(延べ53回)	1,988人
第4期	H30	13事業(延べ47回)	1,068人
第5期	H31・R1	13事業(延べ95回)	4,728人
5か年合計		60事業(延べ251回)	9,184人



関連 KPI 指標	基準値	目標値	実績値	達成率
高梁川流域学校での人材育成等のイベント参加者数	761人 (H27)	5,000人 (H27-R1)	9,184人 (H27-R1)	184%

■ 成果

- ・本事業を通じ、圏域における地域団体・企業・大学等のネットワーク化が促進
- ・幅広い世代に、圏域の自然や歴史、文化・産業等について学ぶ機会を提供

高梁川流域圏成長戦略ビジョンに基づく連携事業により実現



高梁川流域マップ

■ 事業内容

テーマにより、コンテンツ追加

- ・流域 Map
- ・特集ページ(高梁川流域連盟HP掲載)
- ・小学生向けの特集ページ(高梁川流域連盟キッズサイトに掲載)



高梁川流域デジタルアーカイブ

■ 事業内容

テーマにより、毎年各市町2本ずつ(年度で20本)映像を作成し、高梁川流域Map上で公開。作成した映像は、H28年4月から圏域内のCATVで放映するほか、YouTubeの専用チャンネルでも公開。

年度	流域マップ テーマ	件数	デジタルアーカイブ テーマ	本数
H27	流域ゆかりの偉人・賢人	50件	圏域の偉人・賢人	20本
H28	流域の伝統的な行事と芸能	67件	圏域の祭り・無形文化財	20本
H29	流域の指定文化財(史跡)	81件	圏域の史跡	20本
H30	流域の文化財(建造物)	89件	圏域の建造物	20本
R1	流域の指定文化財(天然記念物)	120件	天然記念物	20本



高梁川流域学校のこれまでとこれから

代表理事 大久保 憲作

高梁川流域学校が2015年に産声を上げてから5年になります。その背景を少し。1995年に阪神淡路大震災が発生、甚大な被害に解決すべき社会課題は多く、担い続けた市民運動が以後次第に力を付けていきました。

1997年の京都会議(COPP3)は国内でも環境問題を考える契機になり、私は仲間と高梁川流域を活動ステージとした「森と水と暮らしを考える日」GREEN DAY 2003を立ち上げました。メンバーには高梁川流域学校理事の中村泰典さんや森光康恵さんがいました。2011年3月に東日本大震災が発生、不幸にして原子力発電所の事故にも繋がりました。これ以後、社会の課題解決は従来の行政や市民団体の活動に留まらず、企業セクターにとつても他人ごとではなく単なるCSRから本業による課題解決型社会貢献(CSV)への転換が進みました。

思うに、昭和29年3月に大原總一郎氏によって設立された高梁川流域連盟の設立理念は、戦後の企業人(市民)による地域社会への責任の発意でありました。それがGREEN DAYの原点になり、後の高梁川流域学校へと繋がってきます。

2013年に流域連盟創設60周年を記念し流域の自治体や関連団体により「高梁川流域サミット」が開催されました。折から政府の進める地方創生プラン、地方中枢都市による広域連

携モデルが示され、それに合致する地域振興プランとして倉敷市と流域連盟の自治体が合意し、7市3町の「高梁川流域連携中枢都市圏事業」が2015年よりスタートしたのです。

高梁川流域学校は大学・企業・地域団体・NPO・自治体などと協働し、流域の自然環境や歴史、文化風土、産業を「社会教育・地域教育」の教材として編集、それらを住民や訪問者に持続的に提供することで次世代の人材育成機関を目指しました。美星町出身の民俗学者神崎宣武先生には、流域学校の設立当初より学校長を引き受けて頂いており、学術、文化、精神における志柱です。

流域学校の5年間の事業の詳細は年次報告書に詳述しています。実力のある理事が全力で流域に働きかけた事業が記録されています。

特筆すべき連携の成果があります。それは高梁川流域内で同じ業界ながら異なるエリアで金融活動をしている信用金庫さんと流域学校の連携です。北から備北、吉備、玉島、水島の4信用金庫さんと「高梁川流域圏の持続的な発展に向けた連携に関する包括協定」を2016年12月に締結。各信用金庫さんが定期預金「高梁川の恵み」を同一名称で同一期間募集し、募集総額に定率を掛けた額を3年に亘り流域学校にご寄付いただくという画期的なCSV活動になりました。流域の企業が流域学校の社会活動に「志金」として託す社会的投資であり企業が地域活動団体へ委託する好事例と評価された事はそれを目指してきた私にとって大変嬉しいことでした。

さて、流域学校が活動してきたこの5年間で、時代は想定を越え変貌しつつあります。空前の人口減少社会、AIと人間の予想外の暮らし、大規模な気候変動と大災害時代の予感、

地球温暖化を抑制する先送り出来ない多国籍の取り組み等、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリさんに言われるまでもなく人類の自分中心です。リーダーはこの社会の変化を感じ新鮮な感性による迅速かつ真摯な行動がとて大切だと考え、私は開学5年の節目を機に代表理事を辞し「理事として彼らを支える側に回ろう」と考えました。経済の繁栄を全ての基盤とした「豊かな暮らし、その常識を越える「新たな幸せ観」を創造できる斬新な感性を持つ方々に6年目以降の運営を託したいのです。

流域思考とSDGsを融合する事は、自分ファーストと地球ファーストを同心円上に調和させること。その彼方にある穏やかで素敵な暮らしに満ちた高梁川流域の未来を作り上げて下さい。

そして世界に通用する日本一の流域を目指して下さい。

高梁川流域学校第6期に向けて

顧問 濹澤 寿一

大原総一郎氏が「高梁川流域連盟」を提唱した想いは何処にあつたのだろう。何故、倉敷ではなく流域でなければならなかったのだろう。そんなことをいつも考えます。東西の冷戦が終了し、資本主義が共産主義に勝利して以降、世界の金融資本は投資家たちのパソコンの中で増殖し、实体经济の百倍以上に達しました。昨年2月には国連が上位26人の資産が、下位38億人の資産を上回ったと報告しました。その26人の資産形成は、多くがグローバルな金融資本の操作により得たものです。私たちの暮らしも、国のGDPさえも、このバーチャルな価値に漂っている木の葉となつていきます。そしてその価値は実態を伴わない故に、ある日突然、バブルがはじける如く消えてなくなります。そしてその影響を真っ先に受けるのが、都市（グローバル市場）からモノを買っている地域と呼ばれる場所です。1つの都市ではなく、川の流れて結ばれた流域で、経済や文化を循環、発信できることが、この金融資本の激動から暮らしを守る最善の手段なのかもしれません。同時に、今後10〜20年間でAI、IoT社会が進み「働く」ことの意味が変わります。いまの子供たちは彼らが大学を卒業するときには65%が今はない職業に就く、これからの20年で既存業種の47%が消滅する、などの論文が発表されています。戦後は「GDPを向上させるための労働」でした。経済的価値

を重視して生きることが幸せであり、戦後、復興のために経済を建て直し、生産性を上げることが最優先という社会の価値観です。そこではお金の多寡が労働の価値を表します。その基準にあてはめると、専業主婦は意味のある労働ではなく、育児も親の介護も同様に見られてきました。年収は高い方が幸せで、どの会社に勤めているかが社会的ステータスであり、大企業の方が中小企業より社会的価値が大きいと思われました。まさに、高度経済成長期の論理です。今後予想されるAI、IoT社会では多くの労働が人工知能に置き換わります。そして「生きる意味を問う労働」「自分の生き方の価値を高める労働」をどのように作り出せるかが働く意味になるでしょう。私は、お互いがコミュニティの中で必要とされ、多くの人と、世代が流域の中でつながっている社会を実現することを目指しています。人間は一人では生きられません。私の考える未来の社会では、お金より「共感」や「協働」が大切にされます。しかし、共感にも協働にも規模があります。何故ならば私たちは肉体を持つことからです。無限の人数と共感を共有することは不可能です。その規模が流域なのではないかと考えます。かつて幕末期には岡山県には多くの私塾が生まれています。時代の大きな変わり目に、次の時代を担う人材育成の場が、この地域の特性なのかもしれません。この地域から生まれた「高梁川流域学校」が未来社会を支える人材輩出の場となることを夢見ています。（認定NPO法人共存の森ネットワーク 理事長）



高梁川流域学校のこれから

理事 森光康恵

地球規模で起こっている自然環境の異変、不透明な政治、不安定な経済状況、貨幣からキャッシュレスへの転換、人工知能が参入した暮らしへの変化など、想像をはるかに超えたスピードで大変革する時代に生きている私たちです。そして、持続可能な社会にするために、世界中の人々に出された宿題、SDGs、2030年までに達成すべき17の目標。

- ① 貧困をなくそう
 - ② 飢餓をゼロに
 - ③ すべての人に健康と福祉を
 - ④ 質の高い教育をみんなに
 - ⑤ ジェンダー平等を実現しよう
 - ⑥ 安全な水とトイレを世界中に
 - ⑦ エネルギーをみんなにそしてクリーンに
 - ⑧ 働きがいも経済成長も
 - ⑨ 産業と技術革新の基盤をつくろう
 - ⑩ 人や国の不平等をなくそう
 - ⑪ 住み続けられるまちづくりを
 - ⑫ つくる責任つかう責任
 - ⑬ 気候変動に具体的な対策を
 - ⑭ 海の豊かさを守ろう
 - ⑮ 陸の豊かさを守ろう
 - ⑯ 平和と公正をすべての人に
 - ⑰ パートナリーシップで目標を達成しよう
- 17の目標の内、私が関わっている、「聞き書き」と「こども造形ひろば」は④⑩⑪⑬⑭⑮にあたります。そして、高梁川流域学校の理事も、それ

ぞれの所属する団体で、さまざまな課題を解決するために活動をしています。これからの、高梁川流域学校は、「⑰パートナーシップで目標を達成しよう」がキーワードだと思います。

それぞれの活動を、臨機応変に、そして柔軟に連携した人材育成活動の場であり、コーディネートすることが求められていると思います。

また、外から見た時に、「高梁川流域学校って何をしている学校なのかわからない」という方が多いと思います。高梁川流域学校は、例えば「持続可能な未来を築く人材育成の場です」と誰にでもわかる言葉で、一目で見てわかる内容は必須です。

しかし、多様な団体が広域連携し活動する事は、事務局費や活動費の確保など、行政の枠を超えた連携活動は難しく課題でしたが、5年間の高梁川流域学校として活動した実績により、6年目の新たな一歩へと踏み出すことになりました。5年間を振り返り、改善すべきこと、継続すべきこと、新たに取組むことなど話し合い進めています。

大きく変わる時代に生きる私たち、持続可能な未来へと、大切な役割を担っていることを感謝し、想いを新たに次年度に向かいたいと思っています。

(きび工房「結」 主宰)

災害国日本に再び必要な流域という視座

流域の成長戦略の根幹を育む支援活動を

理事 赤木 美子

高梁川流域学校の設立当時、私たち一般社団法人チカクは「子ども防災ネットワークおかもま」を企業や県内NPOと設立し、東日本大震災後を生きる子どもたちに自然災害についての心構えを説く出前授業をはじめていました。当時、あれだけの人を亡くし、災害からそう遠くない日でしたが、すでに岡山は災害について無頓着であったと思います。「流域」というくくりは、災害が頻発する日本の国土を思えば欠くことのできない「視座」と考え、その設立において、何かできることはないだろうかと考えていました。

町なかにある「小さな森」を少し離れた場所から訪れる親子が楽しみ、その姿を見守りあたたかく声がけする地域の人たちが支える「第三のコミュニティ」を想定したのが、「高梁川流域学校初等部あちのもり分校」です。災害時に役立つように、顔の見える関係性の復活と身近な自然、地形に触れることも目的として高梁川流域学校初年度に私たちが手掛けたこの取り組みは、その後、地域の人たちに受け継がれ名前を変え実施されています。

私たちがフォーカスするのは、いつも親子とくに乳幼児とその親を含む家族です。当初は、このつくりこどもたち「九つぐらいまでの子どもたちとその親を対象にしていたのですが、小学校に上がってから顕在化する子どもの様々な困

り感、崩壊する学級の話があり、もっと早期に課題の芽を摘む必要性を感じて2018年度から始めたのが、「0歳児の発達支援に特化した地域拠点事業「ママばれっと」」でした。

ここに至るきっかけとなった、地域子育て支援拠点の存在について少し、お話ししましょう。それは3歳までの乳幼児とその保護者の居場所であり、私たちもその一つを倉敷市からの委託で茶屋町駅の近くに開設（年間240日）しています。情報だけはふんだんにある社会の中で、では、目の前のこの子にいま一番何が必要なのか分からない。こうした地域が伝えることができなくなった「文化としての子育て」を伝え育む場所として、国がわざわざ毎年、家賃・人件費等々の予算を、中学校区の一つを目安に全国で6800カ所以上の拠点につけています。そういう時代なのであるということに、注目していただきたいのです。

町なかで遊ぶ乳幼児を見ることが少なくなりました。当然、子育ての現状を知らないまま、身近に子どもの育ちのモデルを見ることがありません。便利な生活が動かない体を作り、ロコモティブシンドローム（運動器症候群）はお年寄りだけの問題ではなくなっています。

流域の「一番の資源は「人」」。そのスタートアップをどう支えるか。母子保健の目線ではなく、流域の成長戦略の根幹を育む「視座」を持って、産前産後乳幼児を含む親子の問題にかかわっていきたくと思っています。

(一般社団法人チカク 代表理事)

第6期に向けて、水循環と歴史・文化的景観

理事 中村 泰典

・水の道が見えなくなつて

今から60年前の県南の平野部は、どこの家も周りに川があつた。私の家の裏は幅が1メートルもあるかないかの川で底が見えたり見えなかったりのどぶ川だったが、玄関を出て少し歩くと川底が見える用水がながれ、登下校時の路地道は用水の小さな支流のどぶ川に沿つて学校へ続いていた。まだ下水道がなくヴァキュームカーがまちの中を走つていた。下水道が普及しはじめるのは小学校の低学年のころ、今から60年前で、水洗トイレが付いたときは鼻が高かつた。倉敷のまちなかでは一番早く下水道が敷かれた地域だったが、多くの家庭はその後何年も落とし紙が必要だった。まだ半世紀すこししかたつていない。

そのころからまちの中の川が暗渠になつてアスファルトで覆われ、道になつて風景が変わつていった。私たちの生活の一部が見えなくなつていった。まさに高度成長期の始まりの時期である。「私の体は高梁川の支流だ」と思つて久しいが、私の体を通つた水が私から出て海までの川筋が見えなくなつてきたのがこの時期からだ。水の循環が見えなくなつて、どぶ川とは違う汚れが川や池、湖や海に流れた。汚すのは早かつたが元に戻すにはずいぶん時間が経ち、60年経つたがもう少し時間がかかる。

・町並み保存ネットワーク

高梁川の水の道は、人ともものが移動し、文化

が交流し、道や鉄道で人や物が往来した。川や道、鉄道はまちも作つた。そこに文化や歴史の景観を重ね、長い時間をかけて伝統が育つていった。

流域のまちづくりのネットワークができてもう15年が過ぎただろうか。当初は地域づくり団体の交流会だったが、8年前から町並みや町家の保存活用団体のネットワークとして情報交換と交流活動を進めている。6年前から暮らし文化の体験と継承を進めるため町家・町並みを舞台に「備中no町家deクラス」と町家保存の課題解決を図るための「備中町並みゼミ」を開催し、地域間の交流はずいぶん進んだ。

・第6期の試み

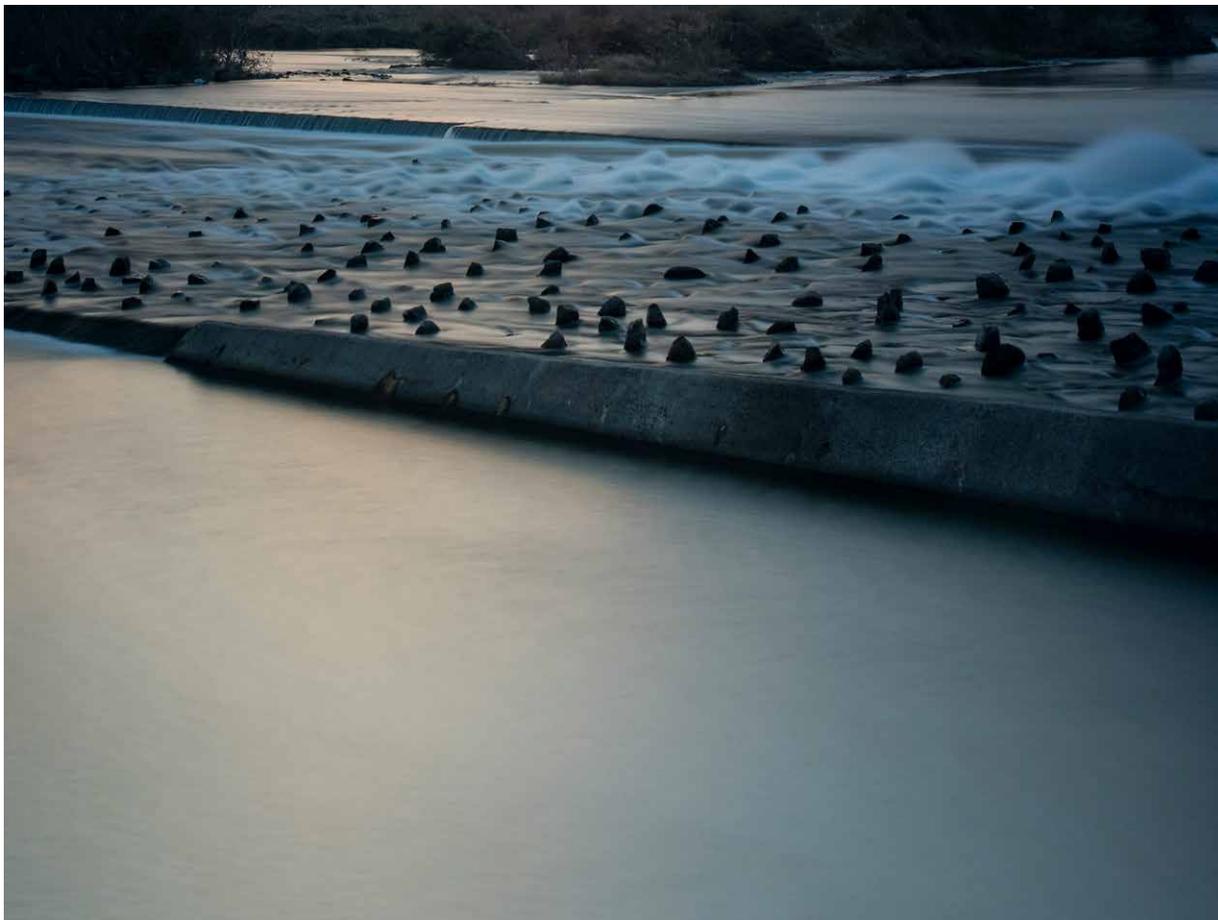
NPO法人倉敷町家トラストと備中町並みネットワークは高梁川の水系を軸にした歴史的景観と文化的景観を再発見し次世代へ継承する活動をさらに進めていく。

目に見える景観と、目に見えない景観を深く知るために、もう一度目を睜り、遠く彼方を想像し、近くを注意深く見極め、祖に耳を貸し、風と土に耳を澄まし、肌で確かめ、水と土地の夢の香りを味わい、五感を高めるために高梁川の水の道、人の道、そして暮らしの道で自然、人、仕事、たぐみに出会う学びにまた出かけようと思う。

・文化的景観とは(文化庁HPより)

地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの

(NPO法人倉敷町家トラスト 代表理事)



2030年、大人になる君たちに。

理事 坂ノ上 博史

・世界とつながろう

君たちは、コンビナートのまち、倉敷市水島地域で生まれました。あなたの家のそばの臨海鉄道は、東高梁川という川を埋め立てた上に走っています。

その高梁川は、中国山地からきています。アマゴの養殖をしている新見の池でバーベキューをしましたね。あの水も、高梁川の一部となって瀬戸内海に注ぎ、広い世界の海につながり、更に、海水は蒸発して雲となり、雨となり、川となって循環しています。飲み水として私たちの体の一部にもなっています。

君たちも、水の流れのように、自由に世界とつながってほしいと思います。

・まだ見ぬ価値観を受け入れよう

驚くかもしれませんが、You Tubeが登場してからまだ十数年しか経っていません。世界は大きく変化し、君たちはまだ誰も見たことがない未来を生きています。しかし、過去を無視してはいけません。常識を学び、先人に敬意を払ったうえで、人生を自由に選ぶことができます。

その際に、2つのお願いがあります。1つ目は、自分以外の人たちに寛容になることです。価値観の違う人と衝突した時、又は自分が正しいと思った時に、どのように行動できるか、であなたの真価が問われると言います。

2つ目は、自分自身にも寛容になることです。自分で楽しく、ストレスがない生き方(学び方、働き方、遊び方、恋愛なんかも含まれるかも)を選択した時に、それが他の人にとって違和感があり、一変

だ「非常識だ」「普通ではない」等と言われるかもしれませんが、自分を否定することなく、自らを尊重してほしいです。

AIやIoTなどのテクノロジが、生活と価値観をあっという間に変えてしまつてしまうでしょう。その時に、誰もが常識に囚われないチャレンジができるよう、寛容なありかたを身に付けてほしいのです。

・多様な学びを
では、自由かつ寛容で、チャレンジに溢れた生き方を、どこで学ぶことができるのでしょうか。

今、君たちは学校で勉強しています。でも、先生と教科書以外からも学ぶことができます。知っていますか？人生の最初の学びは、家族からでした。そして成長した今、友達との遊びや、スマホでつながるゲームからさえ、多くのことを学べます。外に出れば、石ころからは、地球の歴史を学べます。1匹のトンボに世界の環境問題を学ぶこともできます。世界は広く、豊かで、多様であるということを知るには、教室という枠を飛びだしてみることも必要かもしれません。

そんなことを考えながら高梁川流域「学校」という活動を、しています。この流域に生きる私たちが、誰ひとり取り残されることなく、豊かに学んでいける地域になるように、頑張つてみます。

10年後、青年となるあなたたちと一緒に活動ができた嬉し、もし一緒に嬉しくなく、君たちが楽しく生きていけばいいな、と願っています。

くはると(11歳)、たくま(7歳)。二人の甥っ子たちに、

(一般社団法人高梁川プレゼンターレ 代表理事)

高梁川流域学校

第6期移行へ持続可能な活動を目指して

理事 古川 明

流域学校のこれまでの活動を、振り返ってみる時、それぞれの事業は、発展を遂げながら、一定の成果を上げつつある一方、流域学校全体としての活動を俯瞰してみた時に、流域学校の認知度の低迷をはじめとして、幾つかの課題が浮き彫りになってくる。

具体的には、流域ミーティングへの参加者が、どちらかと言えば、有識者や専門家に偏る傾向があり、一般の人たちが大勢参加する裾野の広がりが感じられなかったこと、もうひとつは、「7市3町の連携」を銘打ってスタートしながら、一言で言えば、各事業の主催者が、流域学校設立に至るまでの流れに沿って、それぞれの活動エリアや事業に特化した活動に終始し、流域学校本来の目的である、流域各エリアを繋ぎ、高梁川上流から河口に至るまで流域全体を包含する活動を展開するに至らなかった点である。最終年度に当たる今年の残りの期間で、この辺りをきちんと整理・総括した上で、

内包する課題を見える化し、その解決を図りながら、6年目以降へバトンを渡すこと、更には、将来に亘って、世代を超えて継続・発展していく活動を目指して、新たな仕組みづくり(流域全体としてのプラットフォームづくり)を行っていくことが望まれる。

流域学校の認知度を高め、より多くの人の参加を求めていく為には、流域学校全体の広報

活動を充実させていく必要があるが、加えて、事業間同志の連携強化、関係先との連携・協働を推進していくことも重要である。その鍵を握るのは、他でもない地元の若者達、とりわけ高校生たちの存在だ。

水島エリアでは、3年前より、コンビナートクルーズや街づくりに関連する様々な行事に地元の古城池高校が積極的に参加し、数々の目に見える成果を生み出してきており、その活躍の様子が、時折、報道されることにより、高校生自身にとっても、やりがいを感じられる活動になりつつある。こうした流れの中で、特筆すべきは、活動を後輩たちにきちんと受け継ごうとする文化が生まれつつあること、在学期間3年という学校の宿命に神差さんと、学校の職員を軸とし、今年1月に地元関係者や行政の協力を得て「みずしまプラットフォーム」という校内組織が誕生したことである。

また、本プラットフォームを包含する位置づけとなる組織として、2年前に立ち上げられた「行政」、「教育機関」、「地元企業」、「地元住民」等からなる「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」の存在も忘れることはできない。

今後、これら枠組みに魂が注ぎ込まれ、所期の目的を果たしてくれることを切に望むと共に、水島のこうした取り組みが、ひとつのプロトタイプとして、流域の他のエリアへも展開されていくことを期待したい。

(ミズシマ・パークマネジメント・ラボ 代表)

高梁川流域学校 第6期以降に向けて

監事 塩飽 敏史

2015年6月に立ち上げられた「高梁川流域学校」は、5年という一つの区切りを迎え、新たなステップを踏み出そうとしている。この間、高梁川流域学校では、流域の様々な学びの資源を結び付け、学びや体験イベントを通じて、持続可能な地域づくりや人材育成に取り組み、一定の成果を上げてきたと言えるであろう。

私は、第3期より監事として関わると同時に、直接に関わった事業としては、2014、15年に実施した「高梁川流域クリーニング行動」での倉敷第一中学校と連携した河川ごみ調査事業や、2016年に実施した「高梁川流域学生プランコンテスト」などが思い起こされる。その他にも、高校生による「聞き書き」や「水島コンピナートクルーズ」といった活動をを通じて、中・高・大学生といった若者が高梁川流域という地域について知り、この地域に蓄積されてきた歴史や文化、現状や課題に向き合うことで、持続可能な地域づくりについて考えるきっかけとなったのではないかと考える。

現在、高梁川流域の最下流部である倉敷市水島では、市民・企業・行政・大学等の連携による「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」を2018年に立ち上げ、「学び」をキーワードに持続可能な地域づくりを担う人材育成の取り組みを進めている。

水島には、高度経済成長期に発生した大気汚染公害の教訓や、コンピナートをはじめ企業

による最先端の生産技術や環境対策技術から、農漁業といった伝統的な産業に至るまで、より良い未来をつくるための学びの資源にあふれていると考えている。これらを活かして、地域の様々なセクターが協働し、地域に育つ若者や内外の若者の学びを支援しようという仕組みづくりの取組である。

これは、国連が2030年に達成すべきゴールとして定めたSDGs (Sustainable Development Goals) の達成に資するものであると考える。

この学びを通じた持続可能な地域づくりの取り組みの可能性は、水島地域だけでなく、高梁川の上流域から下流域まで含めた流域全体に通じるものである。そのため学びの資源は、高梁川流域全体に多種多様に存在するが、まだそれらが十分に連携して相乗効果を発揮するまでには至っていないと考える。

水島を含めた高梁川流域の様々な学びの資源を結び付け、そこから創造される新たな地域づくりに向けた価値を整理するとともに、若い世代の学びを多様な世代・分野の人が支援する仕組みを作る、その中心としての役割を高梁川流域学校が今後の活動の中で担っていかれることを期待したい。

(公財)水島地域環境再生財団 理事・研究員



高梁川流域学校第6期への期待

監事 石原 達也

高梁川流域における連携は私にとつてある種の憧れです。高校で林業を学んだ際に、川の上流から下流の連携。山と海をつなぐ川を中心としたつながりはとても重要なことであると教えられてきました。漁師の方々が海の恵みを守るために山に植樹をするという取り組みが象徴的であるように、山がどうあるかで海の状態が変わっていきます。川はそれをつなぐものであり、

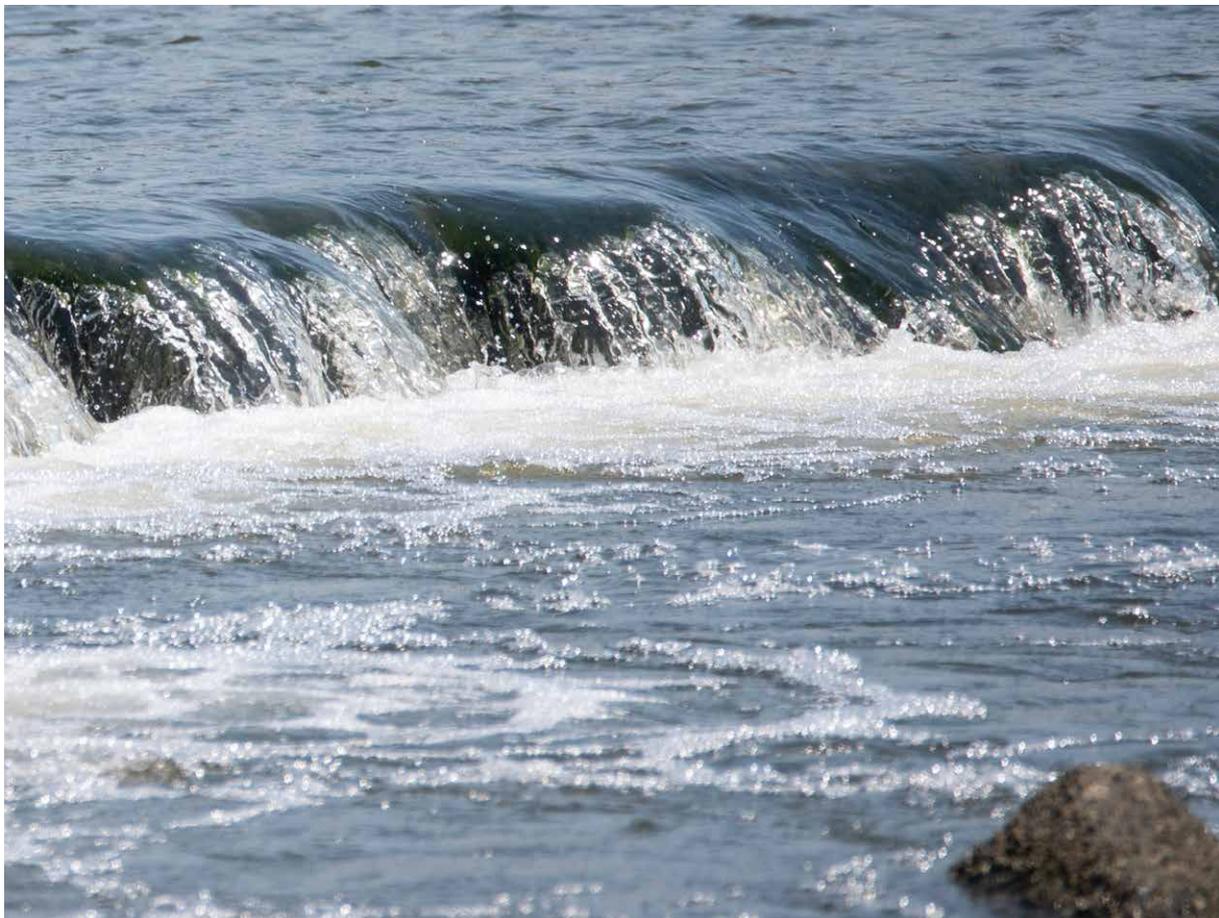
山の土壌から流れる栄養だけでなく、多くの古代文明がそうであるようにその幸を得て人の文明もそこに開かれます。川を利用して多くの資源が運ばれ、自然の生態系とあわせて人の暮らしや文化の生態系が築かれてきたと思います。と、このような浅学を若輩者の私がかつて書いてきましたのは、これまでにない変化の時を迎えているこの日本の中で、これからの時代に対応した循環や文化をあらためてこの高梁川流域に生み出し、一つの解決策を生み出せればと願うからです。

あらためて言うまでもなく、日本は急激な人口減少社会の中にいます。しかもこれからの数10年は人口構成の中で高齢者の割合が多い、少子多老状況が続きます。多くの若い世代が働き少数の高齢者を支える高度経済成長期の人口ピラミッドを前提とした社会システムは通用しなくなっています。一方で世の中はソサエティ5.0の社会と言われ、AIやロボット、テクノロジーが発展しています。すでにインターネットによ

り情報の地域差はなくなりつつあり、中高生と話をするとリニアモーターカーのような早く移動する乗り物など必要ないという子がいいます。なぜならインターネットで必要なものは知り、得ることができるので移動する理由がないからです。一方で格差は拡大し、この21世紀の日本に貧困や虐待で亡くなる子どもがいます。これまでのように製品を大量生産し早く届けるビジネスモデル。世界有数の経済大国を目指す「だけではない」理想、国のあり方が必要です。

そのような中でどのような人を育てるのか。高梁川流域「学校」に期待するのは3点です。1つは地域内金融のあり方、あらたな域内の循環を生み出せる人を増やす。流域において信用金庫の連携があることは重要であると考えます。寄付や社会的投資も含めた志のあるあたたかいお金により人の生活の向上、社会課題の解決にお金を流す。経済成長だけでなく課題解決に投じることはより多くの地域への利をもたらすはず。2つにチャレンジをする人を増やす。デジタルネイティブな若者を中心にこれからの時代に必要なあらたな価値をつくる人を応援することが日本の可能性を伸ばすと考えます。3つに未来世代を育てられる教員を増やす。学校のあり方も含めて変えていかなければ時代の変化に間に合いません。特に中学と高校の時代に何を知り、体験するのか。地域ぐるみでの人づくりに取り組み模索することがこれからのあり方を見出す機会となるのではないかと考えています。

(NPO法人岡山NPOセンター 代表理事)



第五期 事業報告

〈主催事業〉

高梁川ミーティング2020



「知る」「つながる」「継承する」「学び」 流域がもつ可能性について語った

高梁川ミーティング2020は、地域の様々なステークホルダーの輪を広げることを目的とし、これまで流域学校の様々なプログラム(備中志塾など)にご参加いただいた方々、11人委員会メンバー、特に流域で新しいなりわい、生き方を模索・実践している若者を掘り起こし、出会い、互いに学び協力し合い、そのネットワークを広げるために、例年開催しているものである。本年度は、高梁川流域学校設立5年目の総括を行い、6年目に向けて取り組みを展開することを狙いとして、開催した。

参加者は「知る」「つながる」「継承する」「学び」といったキーワードを発表し、それぞれの取組みの視点から流域がもつ可能性について語った。

開催概要

日時：令和2年2月22日(土)10時～16時30分

場所：語らい座大原本邸(倉敷市中央1丁目2)

第1部 事業報告・リレートーク

- ・挨拶 大久保憲作(高梁川流域学校 代表理事)
- ・事業報告(流域学校 理事より)
- ・参加者リレートーク

第2部 講話・レクチャー&ワークショップ

- ・挨拶 山下陽子氏(語らい座大原本邸 館長)
- ・講話 演題：2030年の地域の暮らしとは？ ～学びとないわり～
- 講師：澁澤寿一氏(認定特定非営利活動法人共存の森ネットワーク 理事長)
- ・レクチャー&ワークショップ タイトル：アメリカで一番住みたい町の市民参加型教育
- 講師：吉川幸氏(岡山大学 実践型教育プランナー)

- ・まとめ 大久保憲作氏、山下陽子氏
- なお、第2部は、語らい座大原本邸「くらしき未来K塾」との連携により実施した。

以下、第2部のうち、澁澤寿一氏の講話を、オンラインメディア「倉敷とことこ」に掲載されたものについて、許可を得て転載する。

https://kuratoco.com/kurashiki_miral_kjuku10/
(以上、事務局整理)

・・・

2030年の地域の暮らしとは？

「学びとなりわい」 澁澤寿一氏

澁澤寿一(しぶさわじゅいち)さんは、東京農業大学大学院博士課程を修了し、農学博士として活動されているかたです。

これまでに、テーマパーク「長崎オランダ村」、循環型都市「ハウスステンボス」取締役としての活動や、NPO法人共存の森ネットワーク理事長として、日本や各国の地域づくり、人づくりをされています。

また、2024年度上期からの1万円札の顔である、渋沢栄一氏の曾孫でもあります。

講話では、「地域で学ぶとは、どういうことなのか？」を、澁澤さんが現在の活動をするきっかけとなった秋田県の小さな村を例に、「社会教育」についてお話してくださいました。

秋田県のある小さな村から学んだ「社会教育」

村の奥の氏神様が祀られている社(やしろ)の近くに、大きな切り株が3つあったそうです。



木の年輪を見てみると、280年以上は育っている大木。

村人に「いつ切られたのか」と聞いてみると、昭和21年の4月に切られたとのことでした。昭和21年は戦争が終わった年、終戦の翌年に切られた大木です。当時は、戦争で焼け野原となり、日本が混沌とした時代でした。日本全体が生きる希望を見失っていた時代だったそうです。

秋田県の小さな村でも、どうにか明るさを取り戻すために、村の一番奥にある3本の天然杉を売って、「水力発電で電気を灯そう」という話になりました。

しかし、大木は先祖代々8世代以上で守り続けてきた天然の秋田杉です。

「自分たちの代で切っていいのか？」
「子供たちがご飯を食べるために残したほうがいいのでは？」

さまざま議論が村人のなかで行われました。村人のなかで決心がなかなかつかない時、村長が「どうせなら、切つて後悔しよう」と言つて先祖代々大切に育ててきた秋田杉を、ついに切つたそうです。そして、秋田杉を町で売り、そのお金で水力発電を村に導入して、村人の家に明かりが灯るようになりました。

一家に二つずつ白熱灯が灯ったとき、「明るい」という気持ちよりも先に「あつたかい」と感じ、村人全員に生きる希望が湧いたそうです。

それから、「これからも生きていこう」という覚悟が決まり、杉の木は「宝」と呼ばれるようになりました。

そんな話を村人がしてくれて、「山の中で生きるなら、仕事と稼ぎができないとな」と言つたそうです。

「地域の仕事」を通じて、生き方を伝える

「仕事」と「稼ぎ」って何が違うんですか？

村人に聞くと、「あんたらは仕事と稼ぐことが一緒だもんな」と言いながら、こう話してくれたそうです。

「稼ぎは、家族のため。仕事は、将来のため」
自分たちの子供の世代、先の世代のために、草刈りや木の移植をしなくてはいけない。仕事は一切お金にならないけれど、それをしなければ村は継続していかないのです。お金にならないこともしなければ、村は無くなってしまふ。だから、「稼ぎしかできない人は半人前だ」と、村人は言います。

「仕事」ってどういうものですか？

村人は「祭りだ」と答えました。祭りというと、「遊び」のように思えますが、祭りは「仕事」、寄り合いも「仕事」と村人は話すのです。祭りの終わった翌日から来年の祭りの準備が始まります。祭りは、年寄りから若い者へ知恵を受け継ぎ、祭りの準備を通じて「どうしたら生きれるか」を世代間を跨いで伝えているのです。

(続きは「倉敷とことこ」でお読みいただけます。)



〈主催事業〉

備中志塾



21世紀の備中人 「普遍のねうち」を備えた次世代の人材育成へ。

備中志塾は、「普遍のねうち」を備えた次世代の人材を育成するため、平成24年9月に第1回を開催した後、今年度(平成31年度)の実施で、通算8期(45回)の講座を行い、受講者の述べ人数は、1400人以上となっている。講座の会場は、倉敷市中心市街地に所在する国指定重要文化財大橋家住宅の新座敷をお借りして、18時30分～20時までの1時間半、受講生とともに座学の対面講義形式で備中のあれこれを学んだ。入塾制を取り入れてから第4期となる今年度は、以下4回の講座を行った。平成28年度以降、時代別に古代、中世、近世と「食」をテーマにした講座を行っている。

第1回 節供と薬餌く暦の見方①く

令和元年9月17日(火) 18時30分～20時30分

第2回 土用と食養生く暦の見方②く

令和元年10月15日(火) 18時30分～20時30分

第3回 ハレとケく一汁二菜と一汁三菜く

令和元年11月12日(火) 18時30分～20時30分

第4回 ムラとマチく食の経済く

令和元年12月10日(火) 18時30分～20時30分

なお、この講座の内容をまたまた講義録『吉備』の歴史と伝統文化』が平成30年10月31日に吉備人出版から刊行され、今年度の講座においても、テキストとして使用されている。

(チラシより本年度の開催趣旨について)

前回の東京オリンピック(昭和39年)からの経

済の高度成長期には、生活革命ともいうべき変化がほぼ全国に及びました。食生活の変化も大きく、画一化が進みました。それは、「飽食」という言葉に象徴されます。それ以前は、地方ごとにハレ(行事)とケ(日常)の食文化が多様に発達・定着していました。本年度は、備中地方におけるそれを取りあげ、一部は追体験(試食)もしてみたい、と思えます。

・

令和元年12月10日開催 第4回備中志塾に参加して

(受講生である松本宣秀さんのフェイスブックへの投稿より)

- ・ 高梁川流域学校・備中志塾(令和元年第4回)
- ・ 「旅する巨人」といわれ民藝を顕彰した民俗学者、宮本常一氏に師事された、民俗学者の神崎宣武先生を囲んでの備中志塾：今回は「ムラとマチ」をテーマに、食と経済の変化を江戸から明治、そして前回の東京オリンピックを通して学びました。

- ・ 今ではコンビニもあり、ほぼ日本全国均質化しているのですが、実はほんの少し前まで、マチとムラでは生活・食文化に地域ごとの大きな違いがあり、そのターニングポイントこそ前回の東京オリンピックだったのです。

- ・ 江戸の街道整備・参勤交代の安定した元禄から、明治の鉄道による輸送と魚が内陸へと運ばれるようになり魚の行商人とそれをさばくことでの料理屋・料理人の文化、そして鉄道のガード下の居酒屋文化が広がり、さらに東京



オリンピックでトラック輸送・ほぼ80パーセントがテレビを持つことで方言から標準語へ、生活の革命が起きてくるのです。

・江戸は全国から参勤交代で諸藩が集まることで新しい文化を創造せざるを得なかった「創造都市」(田中優子先生)であり、そこから「外食ハレの文化」が始まったが、マチとムラでは100年以上のスパンがあったのです。

・五器一膳の膳組：明治になつて鉄道整備が進み、またバスが日本全国のムラに行き渡ることで、膳椀講(たとえば、一村で30組必要ならそれをそろえるための講)が成立、そのお膳を納めるための湿度対策された高床式の「膳蔵」が出来る。

・国の重文で会場でもある倉敷の大橋家は江戸・明治ですでに40脚もあり、それは倉敷が江戸時代からすでに「マチ」であったことを示しているのです。

・民俗学者の神崎先生から江戸時代の伝統的な砂糖を使わない日本のハレの日の膳とその「いただき方」をご説明いただき、「三々九度」と神仏との契約・そして大晦日と新年を迎える意義を学ばせていただきました。

・岡山国文祭で神崎先生をお迎えして以来、大原美術館の大原謙一郎氏が、神崎先生を中心に高梁川流域の自然環境保護と育まれた備中の文化を学び、次世代へ継承するための集いとしてスタートした備中志塾…

・高梁川流域・備中文化のシンボルというべき国重文の大橋家で、神崎先生の講義をお聞きしつつ、実際に大橋家で代々使われてきた膳組にて、備中の伝統的な年越しの料理をいただきながら(三々九度をつぐのも本来、巫女の役

目)、令和最初の年末を迎え、大晦日を迎え新年を「備中のご先祖様」をお迎えできる…本当に心ゆたかな時間を過ごさせていただきました。

・あらためて神崎宣武先生、大久保憲作代表理事さま、大橋家御当主さま、岡野智博先生に感謝です。

〈主催事業〉

地域社会人養成講座



若者にむけた備中文化の地域学 備中神楽を見るだけでなく体験する

高梁川流域学校の主要事業である備中志塾を学生向けにアレンジし実施。若者に備中文化の象徴的存在である備中神楽を地域学の教材として活用することを目指した。倉敷市中心部の大原邸を会場として使用し利便性を図った。また、神楽を学ぶ・見るだけではなく、現役の神楽太夫による神楽入門指導を通じて体験することで、神楽がより身近に感じられるよう設計した。

【内容】

◎高校生地域学講座～備中神楽に学ぶ地域文化～(ジュニア備中志塾)：令和元年8月24日(火)14時30分～18時30分

会場：語らい座大原本邸

参加者数：参加者17名 関係者7名

スタッフ(役割及び人数(謝金対象者には※印を)：

・講師業務従事者1人 ※1人

・演技等従事者3人 ※3人

・業務従事者3人 ※0人

【アンケート調査結果】

事前、事後にアンケートを行い、参加者の一部から回答を得た。

・事前アンケートにて、神楽について知っていましたか?という問に対して、「見たことがない」「1度くらいは見たことがある」が合わせて44・4%と、参加者の中でも認知度は低かった。

・事前アンケートにて、地域の神社のお祭りに参加していますか?という問に対して、「まれに参加している」「ほとんど参加したことがない」が合わせて66・6%と、お祭りへの参加意識はかなり低いことが分かった。

・事後アンケートにて、事業全体を通じての満足度は5段階評価で、平均4・8と高い評価を得た。

・備中神楽に魅力を感じるか、という質問に対して5段階評価で平均4・6と高い評価を得た。

・備中神楽の魅力について尋ねたところ、歴史背景・物語・舞などに魅力を感じるという回答が多かった。一方で、宗教的背景については、魅力を感じる人と感じない人との回答が別れた。

・今後の関わり方について尋ねたところ、「観客として見たい」「知識を深めたい」「他地域の人に紹介したい」という回答が多かった。

■この事業の成果と課題

「高校生の認知・波及」

語らい座の山下館長より県下の県立高校を中心に多くの学校の校長先生へご案内し、参加呼びかけを行ったが、応募者数が少なかった。高校教諭の話によると、校長先生経由では生徒までの距離が遠く、連絡が行き届かないことがある模様である。今後は、地域学習に積極的な教諭との連携を強めることが重要となる。

「大学との連携」

高校生よりも大学生の方が地域に対する関心が強い。県外出身で県下の大学に通う大学生が備中神楽に興味を持つ場合も散見される。大学との連携やカリキュラム化には検討の余地がある。

「開催場所」

20名程度の人数になると、語らい座大原本邸はやや手狭であった。開催場所として適切な会場であるが、募集定員については注意の必要がある。

(事業担当 岡隆平)

〈主催事業〉

学生インターンシップ



学生が流域学校の活動に参加し、 地方創生の取り組みについて理解を深める

学生インターンシップの受入について
本年度、2名の大学生インターンシップを受け入れました。

インターンシップにおけるテーマとして、「あたたかいお金」を設定した。テーマに沿って、文献調査や実践活動、メンター（山本将徳）による指導、理事等との討議を通じて理解を深めたうえで、レポートの作成を行った。

△概要▽
受入期間：令和元年10月1日～令和2年1月9日（3カ月）

△インターンシップの振り返り▽
・意欲的な学生が、事業活動に参加していただけで、組織への活気が生まれる効果がありました。

連携した大学：就実大学
氏名：小川真由花、三宅愁人（いずれも経営学部2年）

・今回のインターンシップ活動では、イベント参加に加えて、組織の報告書とりまとめに関して、関係者へのインタビューを行っていたが、予備知識のない学生が役割を担うことにより、話者も、伝えたいという気持ちが高まったようでした。

△主な活動記録▽
1、イベント等への参加

・学生には「誠実さ」「経験と知識への意欲」「地域課題への理解」があればよいと、希望します。

高梁川マルシェ、玉島みなと朝市、真備町復興支援キヤンドルイベント、高梁川流域音楽会、倉敷中央高校「聞き書き」ワークショップ、岡山イノベーションコンテスト、玉島信用金庫「夢キックオフ」助成金贈呈式など、流域学校の理事・団体が関与する行事・イベント等に参加し、実体験を通じて、地方創生の取り組みについての理解を深めた。

・3か月以上にわたって活動する長期インターンシップは、学生及び受入先の担当者お互いが、価値観や得意不得意といった個々の特性まで徐々に理解を得ながら活動できるため、成長に向けてメリットがあると感じられました。受入組織にもメリットがあり、継続した取り組みとなることを期待します。

2、ヒアリング

高梁川流域学校の理事・監事のメンバーに対して、ヒアリングを実施した。聞き取りした内容は報告書にまとめられた。流域学校の連携プログラムでもある「聞き書き」の手法を基本としたアプローチを体験して学んだ。

・学生本人、受入先企業など、主要なステークホルダーにとつてのメリット・デメリットが定量的・定性的に評価されて、わかりやすい形で広く提示され、活動が広がることを期待します。

3、課題図書レポートの作成

課題図書として『エンデの遺言』を指定した。内容の要約を作成したうえで、プレゼンテーション資料を準備し、流域学校関係者や一般の参加者も参加した発表会で、課題図書に関するまとめの報告と、そこからの意見交換に参加した。

・高梁川流域学校では、今後も、大学等からの要望により、インターンシップの受入を継続して実施する予定です。

4、テーマレポートの作成

（担当理事 坂ノ上博史）

〈主催事業〉

水島コンビナートの進化



クルーズを持続可能な事業にむけて 学校と地域と企業が一丸となり盛り上げる

前年度を上回る展開を目標にスタートした第5期におけるクルーズ参加者は、前年を更に上回る196名となった。

今期の活動を、振り返ってみると、2年前に始まった地元古城池高校の生徒達によるクルーズガイドを継続実施できたこと、また、クルーズを一過性のものに終わらせない為に、生徒自らが、コンビナート企業の門を叩き、自分たちの目で観、肌で感じたことを企業紹介も兼ねて取り纏め、水島のエリア情報と共に、フリーペーパーとして仕上げ、各方面から好評を博すことに繋がるなど、生徒達のコンビナート学習に対する学びの姿勢が着実に進化しつつあることを感じさせてくれるものとなった。

その背景に、同校指導者の本事業に対する理解と生徒への時宜を得た指導があったことを申し添えておきたい。そして、もう一つ特筆すべき点は、船の貸し借りの関係に留まっていた船のチャーター先である「水島通船(株)」が積極的な姿勢に転じてくれたことである。自社HP中に、早々と水島コンビナートクルーズ広報用ページを開設するなどのPR活動をはじめ、乗船チケットを自らの手で製作し、古城池高校生手作りのクルーズ用パンフレットと共に、乗船者に配布するなどによって、プログラムの充実を図ってくれたことも、活性化しつつある要因の一つとして忘れてはならない。

以上の通り、関係者それぞれの努力により、進化を遂げつつある中で、JXTGエネルギーOBを乗せたクルーズを皮切りに、今期は計10

回のクルーズを実施することとなった。

ここで、持続可能性という観点から、乗船者を分類してみると、5月末に実施した、岡山大学へオランダから留学中のライデン大学生25名を乗せた新規クルーズが実施される一方で、これまで実施してきた倉敷市職員向けや、福田公民館、水島財団、あるいは水島滞在型環境学習コンソーシアム主催のクルーズなど、毎年、繰り返し実施されるに至ったクルーズもあり、一歩ずつではあるが、持続可能な事業としての体制が整いつつあることが実感できるようになってきた。

以上のとおり、最終年度に当たる第5期は、関係者の努力もあって、多方面からの参加者を得、一定の成果を上げることができたと考えるが、今後に向けて、プログラムの一層の充実を図り、事業そのものの拡大、持続可能なプログラムへと発展させていくことが求められており、その実現に向けて、以下の課題をクリヤーしていく必要がある。以下に、これら課題と考えられる対応策について触れておきたい。

■課題並びに対策

- 1：クルーズの広報
- 2：持続可能な体制づくり
- 3：コンビナート企業の協力の3点が課題に挙げられるが、それぞれの課題に対し、現在、以下の通り取り進めつつある。

- 1：クルーズの広報戦略
- 効果的広報戦略の立案



前述の広報活動に加え、昨春より、水島通船（株）独自でクルーズを毎週実施する体制に移行したが、まだ安定的に乗船者が確保できていないと言いはる。今後は、開設したHPの品質向上を図ると共に、SNSなどの活用を図り、行政とも連携した広報戦略についても検討を加えて行きたい。

・関係人口の取り込み

昨年来、水島商店街にホテルが相次いで進出してきているが、滞在客を、如何にして取り込んでいくかについても、関係者を交えた戦略構築が必要である。

・クルーズガイドについて

現在使用中のガイドに代えて、今後は、古城池高校生の解説をCDに録音し、利用していくことを検討したい。

2：持続可能な体制の構築に向けて

現在、古城池高校が関わっている「コンビナートクルーズ」、「聞き書き」、「水島の街づくり」、「こども食堂」他の事業を、世代が変わっても持続可能なものにしていく為に、古城池高校では、地元商店街やその他関係者も巻き込んで「水島プラットフォーム」を構築し、1月から具体的に活動をスタートさせた。本プラットホームをプロトタイプとし、他校や他近隣エリアへ展開していくことも、同校と連携を密にしながら模索していきたい。

3：コンビナート企業の協力

現在までのところ、クルーズガイドやコンビ

ナート研修の指導者は、石油企業の出身者に限られていることから、石油以外の専門知識を持つ他業種の企業OBの参加協力は是非とも実現させたい課題である。本プログラムは、SDGsの一環として、企業にとっても今後、関わり深いものであり、企業PRや研修用の教材としても活用できると考えられることから、コンビナート企業の門戸を叩き、事業の理解を得ながら、人財と資金、両面からの協力要請を行っていききたい。

（担当理事 古川明）

〈主催事業〉

エリアミーティング(笠岡)



『寝屋子ー海から生まれた家族ー』上映会&意見交換会 ～SDGs 島での持続可能な暮らしとは～

日本で唯一伝統的若者宿の制度で、中学生を卒業した男子数人のグループが寝屋親のもとで寝起きを共にし、共同生活を送りながら、地域の伝統行事や仕事を身につける。

ゲスト 澁澤寿一氏(高梁川流域学校 顧問)

開催日時：2019年6月23日(日)

10時30分～16時30分

10時 笠岡住吉港発チャーター船

10時30分 大飛島着 自由時間

11時30分 昼食

12時30分 澁澤寿一氏あいさつ

13時 映画上映&島民と参加者意見交換会

15時30分 終了

16時 大飛島発チャーター船

16時30分 笠岡住吉港着 解散

開催会場：岡山県笠岡市大飛島 飛島公民館
連 携：備中「聞き書き」実行委員会
一般社団法人飛島学園、飛島カーディアンプロジェクト

澁澤さんのお話の後、映画を観て以下の内容で意見交換した。

①映画を観た感想

・昔の飛島と笠志島は似ていた。

・今の飛島はさみしい。

・昭和30年くらいまでは、映画のような結婚式をしていた。

・昔はあさりやいわしがたくさん捕れていた。

・ニワトリと豚がいた。

②島で暮らす中で大切にできた事

・自分でできることをする。

・助け合いが大切。時には譲ることも。

・家族(子や孫)が島に来やすい環境にしたい。

・飛島のお墓に入れるように自立して生きることを目指している。

③島の方たちの話を聞いて感想と自分の出来ることは何か

・飛島との関わり方をどうすべきかわからないけど、飛島の人とまた会いたいと思ってる。

・自分のおじいちゃんおばあちゃんともっと話をしたいかなーといけなと思った。

④若者に望む事

・島に若者が来てくれることはとてもうれしいが、本当は自分の子どもや孫が来てくれることが一番うれしい。映画を観て、子どもたちに島に来てもらうよう自分が尽力しなかつたことに気が付いた。

島の方は、映画を観て昔の島の生活や、寝屋子制度と似た島の暮らしを懐かしく想い出していた。そして、参加者も島の方と意見交換する中で、今も続く一見煩わしい暮らしの中に、持続可能な島へのヒントがあることに気が付いた。

(担当理事 森光康恵)



〈主催事業〉

エリアミーティング（水島）



水島地域で活動する各団体が一堂に会し、町の活性化に向けた取り組みの加速・促進を図る

日時：2019年9月27日（金）11時30分～16時30分
 場所：水島家守舎Naha ゆとろぎ館
 参加者：30名

目的：高梁川流域の河口部に位置する倉敷市水島地域は、わが国でも屈指の鉄鋼・石油化学コンビナートを有する地域である。しかし、地域では中心商店街の衰退や空洞化が進み、活力が失われつつある。その一方で、商店街の両側に位置する福田・連島地区では、宅地の造成により人口増が見られたり、木村式自然栽培等による環境に優しい農法の展開や従来から持続している漁業が現在も営まれている地域でもある。

この水島地域の活性化と持続可能な地域づくりを目指す様々な取組が、それぞれの組織・団体によって行われているが、互いの連携が、必ずしも十分に図れているとは言えず、活動の効果が限定的になっているものと考えられる。そこで、水島地域で活動する各団体が一堂に会し、情報交流を行う機会を作ることにより、相互に活動を理解し、今後の協働の可能性を探ると共に、新たな連携の誕生によって、商店街を含む、町の活性化に向けた取り組みの加速・促進を図ることが本ミーティングの目的である。

1. 水島の現状と課題（4年間のあゆみ）
 （社）高梁川流域学校理事 古川明氏

導入として、水島商店街を中心とした地域の現状と課題について説明し、その解決を目指して立ち上げられた「水島家守舎Naha」の活動を紹介した。

2. 各活動団体・組織・学校関係者による活動の紹介
 水島地域の資源を活かし、持続可能な地域づくりを目指して活動する各団体関係者から、現在の取組と課題、将来展望等についての報告を行った。
 2-1「学びを通じた地域づくり」協働による環境学習の取り組み」

公益財団法人水島地域環境再生財団（みずしま財

団）理事・研究員 塩飽 敏史

2-2「自然栽培と食育教育の普及促進」

& Co.ada 主宰 田辺 綾子氏

2-3「ミズシマ盛り上げ隊の活動紹介」

ミズシマ盛り上げ隊副会長 野呂 家徳氏

2-4「子供食堂について」

水島子ども食堂ミソラ 井上 正貴氏

2-5「古城池高校との連携と公民館活動」

倉敷市立福田公民館館長 今田 尚登氏

2-6「高校の探求授業の支援」

未来創生学院理事 三宅 範行氏

2-7「社業の紹介とコンビナートクルーズを柱とした活動報告」

水島通船株式会社社長 宗田 憲明氏

3. グループフェイスカッション

ファシリテーター：坂ノ上博史氏（（社）高梁川流域学校理事）

各活動団体の発表を受けて、「環境学習のまちみずしま」ニシナ跡地プロジェクト「公園アート」「高校生（若者）と地域とのつながりの4グループに分かれて現在の課題解決に向けてどんな取り組みが必要か、自分にどんなことができるかをフェイスカッションした。本ミーティングで初めて顔を合わせた団体もあり、地域課題の解決に向けた協働のきっかけづくりをすることができた。

4. 協働の現場ツアー

ミーティング終了後、水島での協働による地域づくりの取り組みの実践事例である、「ニシナ本店跡地」東常盤町第2公園「臨鉄ガーデン」を巡るツアーを実施した。その後、希望者は、「水島コンビナートクルーズ」に参加していただき、倉敷古城池高校生の解説で水島コンビナートの活動や企業同士のつながりなどについて理解を深めた。（担当理事 古川明）

〈主催事業〉

エリアミーティング(早島・倉敷)



2020年 北欧視察報告会 ～乳幼児の発達支援の現状～ 県内の子育て支援者と乳幼児の最初の1000日を語る

北欧視察報告会く乳幼児の発達支援の現状く

■実施概要■

- ・日時 11月9日(土) 13時30分～16時
- ・会場 いかしの舎(早島町)

・報告者

引野里絵 … リエチャイルドサポート代表、
作業療法士

赤木美子 … 一般社団法人チカク代表理事、
保育士

・参加者

20名 … 県内の支援者を中心に近県および
関東からの支援者も含む。

■実施の背景

今回の視察の端緒は一般社団法人チカクが「0歳児の発達支援に特化した地域拠点事業くママぱれつとく」事業実施のために、乳幼児のからだの発達を促す「軽くて持ち運びができくおしゃべりな」なにかを探していた時にデンマーク・ポプルス社の赤ちゃんのための家具に出会ったことにあります。

いくつかの幸せな出会いがあって、2019年10月8日から帰国の途に就く10月23日までの間に、デンマーク(D)、フィンランド(F)、スウェーデン(S)3か国で、乳幼児向けのイベントの視察(D1・2)、乳幼児向けの環境遊具(家具)を開発した企業との意見交換および研修(D4・5・6)、インクルーシブ保育を行う保育施設の視察(F1)、年齢ごとのプロジェクトなど特徴的な保育を行う保育施設の視察(D3)、主に乳幼児とその保護者を対象とした地域子育て支援拠点の視察(F4、S1・2)、育児・産休期間中にキャリアアップの活動を行うNPOとの意見交換(F1)を行いました。

この知見を多くのみなさんと共有したいと計画し

たのが県内の支援者向けに行った視察報告会です。

■印象に残った考え方、キーワード

①子どもは身体で考える。遊ぶことそれ自体に意味がある。自分に自信を持つために運動能力の発達とそれを親子が楽しみながらすることが大切。子どもをワクワクさせ、行動や学びの意味を見つけるのを助ける、子どもの積極的な参加・双方向の思考を見守る。そして子どもをコミュニケーションの一員として受け入れる。

②子どもを中心とした園と家族の役割分担が明確で、情報を共有しあつて子どもの成長に「責任」を持っている。たとえば、記録と報告のシステム(自治体のシステム)と、フォーカスと呼ばれる、一人の子どもに年20回の保育士の観察ーフィードバックのシステムがある。家族との信頼関係を築く基盤になる考え方は、他児や年齢との比較ではなく、その子本人に視点が向いている。

③コミュニケーションの基礎となる自分と相手の気持ちに気づくことを学ぶ取り組み。表情カードを手掛かりに、今の気分を聞き、話し合う。また、自己選択、自己決定のプロセスを大事にしている。小学校に上がる前にこの一年で学んでおきたいことを子どもたちが考えた掲示物の考え方の順序は、まず「相互作用・自己コントロール」について話し合い、その後「日常生活のスキル」「遊び・アクティビティ」「運動」「自己表現・芸術」「知識・学習」の順に決めたとか。

※ なお、この視察はスカンジナビア・ジャパン 笹川財団より、チカクに対し、申請者与其他1名の渡航費の一部を助成いただいたものです。

(担当理事 赤木美子)

〈連携事業〉

高梁川トレイル



笠岡から吹屋へ

— 55年ぶりに姿を現した鮮魚を運ぶ特急ルート「とと道」

明治時代、瀬戸内海の笠岡・西浜(金浦)の港から吹屋の銅山まで、約6回の駅伝方式で12時間かけて鮮魚を運ぶ魚仲仕と呼ばれる集団がいました。山の中の吹屋での宴で最高の御馳走は海の魚、いわゆる「とと」。銅山の関係者は新鮮な鱈や鰯を切望しました。それを運んだルートが、60㍽にもわたって山坂を越えて続いていた「とと道」と呼ばれる道です。一体どこを通る、どんな道だったのでしょか？

2016年の夏、高梁川流域学校事務局から突然、金浦↓美星の「とと道」調査の報告を求められました。私たちはこの道に深い興味を覚え、一体どんなルートだったのだろうか？と10年ほど前から探索を繰り返していました。しかし私たちは、鮮魚の搬送はつきり金浦↓美星↓高梁までだったと思っていました。ところが高梁川流域学校は笠岡↓美星↓成羽↓吹屋ルートの探索を目指していたのです。しかも、ゴール地点に近い成羽↓吹屋コースは、同年の夏には既に一般公開されていました。最終、ゴールは吹屋だったのか！目が覚める様な思いがしました。

以来、私たちの「とと道」探索は、それまで連携の無かった矢掛、美星の同好の士と共に、金浦↓矢掛↓美星↓成羽の徹底調査という新たな局面を迎えました。

その後の約1年半にわたって「平成とと道」の空白部分の調査が精力的に進められ、あやふやだったルートが判明、密生した草木を伐採、歩けるトレイルとして「とと道」を復活させることができました。

これを受けて2018年には1月14日、28日の両日、雪が舞う中、第1回トライアルウォー

ク(笠岡―美星)を実施(45名参加27㍽/9時間)。2019年には2月23日第2回(金浦―成羽)を実施(33名参加41㍽/12時間)、一般の皆様にも「とと道」を堪能していただくことができました。そして今年(2020年)は1月19日と3月8日の2日間にわたり第3回ウォークを実施中です。このウォークにより金浦に始まる海からの道、矢掛の里山の道、美星の吉備高原の道、成羽の奥山の道が60kmにわたって一つに繋がります。高梁川流域の地域を迂回すること無く北上するととと道。そのつなぎ方は強引なまでに直線的で、ひたすら目的地を目指す「道」というものの本来の姿が見えてきます。重荷を背負って先を急いだ魚仲仕達の荒息づかいも聞こえてくるようです。

高梁川トレイルの企画は「歩くことを通して、高梁川流域の自然の素晴らしさや歴史・文化・産物などの魅力を存分に味わっていただく」ことを目標にスタートしました。とと道の全貌が見えて改めてこのテーマの意義が納得されます。私どもはここ10年間は何としても毎年ルートの草刈りをしようと誓いました。多くの皆様に歩いていただければ55年ぶりに再び姿を見せたとと道はその姿を維持してウォーカーを迎えてくれるだろう。そしてその中にはこうした道に強い関心を寄せる若い人も現れるだろう。歩けば、備中の自然の素晴らしさを知り、この地を誇りに思ってくれるだろう。そう考えた次第です。この機会に完全版ガイドブックをとりまとめました。ぜひこの冊子をガイドに、吉備路の山野と歴史を存分にお楽しみください。

(事業担当 備中・とと道トレイル 金子晴彦)

〈連携事業〉

こども造形ひろば

造形活動を楽しみながら感性を豊かにし
“生きる力”をはぐくもう

「こども造形ひろば」は、「そうじゃぼっけえ造形の会」が、公益財団法人総社市文化振興財団の事業に採択され開催。総社市内全校の2・3年生を対象に公募し、抽選で30名の講座生に7回の講座を実施した。また、こども造形ひろば卒業生（4年から6年生）有志24名に特別講座を実施、そして、講座生全員の作品を一堂に展示する展覧会を開催した。また、今年度で2回目となる岡山県立大学COC+事業「地域協働演習」で10名の大学生を受け入れ、大学と地域の連携による人材育成事業の実践の場として、学生にとつても会にとつても有効な活動へと実績を重ねている。

【内容】

◎講座：5月～9月全7回

会場：常盤小学校 多目的室・図工室（講座）、常盤公民館（特別講座）展覧会（総社市立図書館展示室）

対象：小学校2・3年生 参加者：30名

講師：布下満（洋画家）大平和朗（洋画家）平田敦司（彫刻家）河合静江（スィーツデコ作家）金池兼広（ものづくり作家）平田勉（小学校教諭）柏原寛（中国学園大学准教授）

◎特別講座（8月23日）

会場：常盤第2分館 参加者：「こども造形ひろば」卒業生有志24名

講師：ミヤケノリコ氏（テキスタイルアーティスト）

◎展覧会（9月14日、15日）

会場：総社市図書館3階展示室

ワークショップ講師：切り紙作家 コウキシザーハンス

■この事業の成果と課題

【成果】

毎年講座の中には様々なドラマがある。今回印象に残ったのは、第1回目に何を描こうか迷って涙ぐんだ子が、回を重ねるごとに笑顔で作品作りに取り組みようになり、自信を持ち積極的に講座に参加した姿だった。作品展来場者のアンケートには、「一つのテーマからみんな違う作品が出来ていて、個性豊かな作品で良かった」とうれしい感想があった。なによりも、受講生の楽しそうな笑顔と真剣な制作の姿、他校の生徒との交流、完成した喜びは子どもたちの自信へとつながったことを実感した。

【課題】

定員25名に対し、毎年定員以上の申込みがあり、抽選で30名を受講生として受け入れている。参加できなかった方には大変申し訳なく、必要性を感じている人が多くいることをしみじみ感じると共に、対応しきれない事へのジレンマに毎回スタッフは悩み、話し合いを重ねている。
(担当理事 森光康恵)



〈連携事業〉

大学生が山林の保全活動を行いながら 成長するプログラム 〈 Forestry Field Camp 〉



林業というナリワイを通して森林の循環型サイクルを学ぶことで
将来の地域を担う人材を育成する。

2019年度は、8月と2月にそれぞれ14日間と10日間のプログラムで本活動を実施しました。県内外から述べ16名の参加者が集まり、大学生、社会人、移住希望者などそれぞれが思いを持って本活動に参加してくれました。高梁川流域の最北のまち新見市で開催している本活動ですが、毎年雪山での作業となることが多い後期開催時も暖冬で積雪がなかった。

本活動は、大学生を中心に、期間中は宿舎で共同生活を行いながら、森林の保全活動を行うプログラムです。単なる間伐体験活動とは違い、普段から林業に従事しているフォレストリーダー指導のもと、参加者は実際にチェーンソーを持ち、1日あたり5〜10本の立木を伐採し、造材、出荷まで行います。実際の林業の現場に参加する形式でプログラムを実施することで、森林の公益的機能だけではなく森林保全にかかるコストなど経済面から見た視点を加え、森林の課題について広域で学んでもらっています。

参加者は、伐採の経験はない初心者が大半で、はじめはチェーンソーのエンジンをかけるのも苦労しながら活動は始まります。本活動に協力いただいている備中県民局の方にチェーンソー講習を行なっていただき、徐々に機械に慣れていきます。活動終盤には全参加者が樹齢50年超えの木々をバンバン伐採していくまでにレベルアップしていくため、自らの成長を肌で実感できるため、視野を拡げたいと思っている学生の皆さんには新たな自分に出会える活動となっています。

【実施内容】

6、7月参加者公募
8月18日〜8月31日
2019年度前期 Forestry Field Camp 実施
場所：新見市神郷地内山林
参加者：県内外6名
12、1月参加者公募
2月19日〜2月29日
2019年度後期 Forestry Field Camp 実施
場所：新見市大佐地内山林
参加者：県内外10名

■この事業の成果と課題

【効果】

環境という社会的テーマに取り組みながらも、自己成長に繋がる場として、未来を担う若者の人材育成に寄与できる活動となっています。

【課題】

本活動の発信に対しての時間が取れておらず、活動の認知とそれに伴う参加者の増加が課題である。(参加者が増加すると、共同生活やチーワークにさらなるシナジーが生まれる。)

(事業担当 一般社団法人杜守 松田礼平)

〈連携事業〉

MASCによるドローン活用事業



次世代へ向けて「夢」を与える先進的な技術を目指す組織

岡山県倉敷市水島地域への航空宇宙産業クラスターの実現に向けた研究会

【MASCとは】

岡山県倉敷市水島地域への航空宇宙産業クラスターの実現に向けた研究会(以下MASC)は、2017年11月27日に設立された。

倉敷市には1941年から1945年ごろまで、航空機製作所及び試験飛行場が設置されていた歴史がある。そして、現在の水島コンビナートの企業が保有するものづくり技術を、更に新しい産業分野に活かして、クラスター企業群を立ち上げようとする有志が集い、当研究会の設立に至った。

航空宇宙産業を核に、その周辺関連産業が、倉敷市及び高梁川流域で新たに創業すること、あるいは新事業に挑戦し、地域のものづくりを発展させることを目的としている。MASCは、次世代へ向けて「夢」を与える事ができる、先進的な技術を目指す組織である。

MASCには、「航空機部会」「ドローン部会」「人口衛星・ロケット部会」「NEWビジネス探査部会」の4つが設置されている。本稿では、「ドローン部会」の活動を中心に報告する。

【本年度の成果】

■復興支援イベントドローンフェスティバル in 真備

真備町の復興支援として、MASC内のノウハウを活かし、真備町の子どもたちが真備町で学び、親子で楽しめる機会を創出することが、このイベントの目的である。普段なか

なか学べないドローンに触れることで、子どももの関心や学ぶ意欲を高める効果も期待した。

9月29日(日)、ドローンビジネスラトラトリー倉敷真備校(倉敷市真備町有井1612-1)にて、ドローンイベントを開催。参加者の子どもたちには、プログラム教室と機体操縦の2種類のコースにわかれて、ドローンを体験してもらった。他にも、ドローンを利用したYesNoクイズや写真撮影、産業用ドローンの展示も行った。

午前と午後の2部制で、合わせて16組の親子連れが参加。アンケートには、「外で撮影をしてみたい。」「もっと空高く飛ばしてみたい。」「といったコメントが寄せられた。

なお、ももたらう基金の助成事業として、2回目のイベントを2020年3月下旬に実施する(3月下旬に実施する予定があったが、ウィルスの影響により延期した。)

■第2回航空宇宙ビジネスフォーラム in 倉敷
このフォーラムは、航空宇宙産業に関連する新技術や新産業の取り組みについて、講演、プレゼンテーション、展示、交流等の形をとりながら、地域内外のステークホルダーの連携を深め、倉敷市及び高梁川流域でさらなる創業や新事業の創出・発展を目指すものである。

10月4日(金)は前夜祭として、大原美術館本館で懇親会が開催された。第1部では、「大原美術館って、小宇宙?」というタイトルで、大原美術館理事長の大原あかね様による講演が行われた。第2部では、倉敷国



際ホテルの協力のもと、参加者が食事・歓談を楽しんだ。

10月5日(土)は、倉敷市立美術館講堂でフォーラムが開催された。総勢1000名の参加の中、アリアル・イノベーションLLC.代表の小池良次様、東京大学院教授の中須賀真一様らの講演が行われた。参加者は航空宇宙産業の最新事例に触れることができた。

なお、当日の様子は、MASCウェブサイトでも動画として視聴することができる。

■ドローンを用いたプラント点検の実施

ドローンを用いたプラント点検業務を、瀬戸内エンジニアリング(株)が三菱ケミカル(株)岡山事業所より受注。MASCは協力という形で、本件に関わった。

11月13日(水)、三菱ケミカル岡山事業所で、ドローンを用いた点検の実証実験を行った。当日は多くのメディアが取材に訪れ、同日夕方のニュースや翌朝の新聞で取り上げられた。

プラントの定修工事には、多くの人員と日数が費やされる。今回の実験では、フレアスタックを撮影。通常は3人の作業員で半日かけて点検するところを、ドローンを用いることにより15分ほどで完了することができた。実験の結果、目視での点検に関しては、ドローンで代用可能なことが明らかとなった。

この点検業務は、2019年3月に取りまとめられた『プラントにおけるドローンの安全な運用方法に関するガイドライン』に沿って、プラント設備の上空でドローン飛行を行

う公開事例としては、全国初となった(MASC調べ)。今後は、MASCの会員や画像解析のパートナーと共に、プラント点検事業を行っていききたい。

■岡山・倉敷エアロスペース懇談会の立ち上げ
MASC・倉敷岡山両商工会議所の3者により、「エアロスペース懇談会」を企画。2019年12月23日(月)、「第1回 岡山・倉敷エアロスペース懇談会」が開催され、会則案・人事案が検討・承認された。会長には、MASC桐野理事長が就任した。

今後、「瀬戸内の文化・経済に開いた空のイノベーション拠点の整備に関する検討」などをテーマに、活動を展開していく予定。MASC・倉敷岡山両商工会議所の相互の緊密な情報共有と連携、協力を図り、航空宇宙産業の拠点確立と新しい交通・物流・通信システムの構築を目指し、実現に向けた研究の推進を目指す。

本会の事業として、航空宇宙産業の研究と会員及び関係団体との情報共有、航空宇宙産業の振興支援などを行う。

(担当理事 坂ノ上博史)

〈連携事業〉

高校生によるまちの匠への「聞き書き」

第10回高校生によるまちの匠への「聞き書き」2019
～10年目を迎えて～

2010年度に笠岡市市民提案型協働事業としてスタートした、高校生によるまちの匠への「聞き書き」は、笠岡工業高校と岡山龍谷高校の2校の参加だった。2011年度から2014年度の4年間は岡山県備中県民局協働提案事業として備中地域の高校を対象に公募し、矢掛高校、倉敷中央高校が新たに加わり実施。2013年度には岡山県生き生き岡山推進賞を受賞。

2015年度は岡山県多様な主体による地域支援事業として実施。岡山大学で大学生に「聞き書き」の講義が実施された。2016年度と2017年度は、高校が主体となり日本財団の助成事業に申請、海に関わる人材育成事業として海洋教育パイオニアスクールプログラムに採択され、「海・山で暮らす匠への『聞き書き』」を、岡山後楽館高校、真庭高校落合校地、津山工業高校、岡山大学をはじめ大学生有志も加わり実施した。聞き書き実行委員会が主体となつて、事業の活動資金獲得のため助成事業への申請をしてきたが、「聞き書き」による生徒の成長を体感し、学校が主体的に取り組んでくれた、うれしく大きな成果だと感じた。

2018年度は豪雨災害により実施が危ぶまれたが、矢掛高校、倉敷中央高校、後楽館高校、岡山大学、そして新たに古城池高校の参加により実施した。今までは、聞き書き実行委員会が話し手を手配していたが、高校生が自ら地域で話し手を選び実施した高校、地域と連携して話し手を決め実施した高校、地域の方からの要請で「聞き書き」を実施した高校と、それぞれの高校で必要な形の「聞き

書き」へと進化している。そして、今年度は2019年度は福武文化振興財団、日本教育公務員弘済会の助成事業として、矢掛高校、倉敷中央高校、古城池高校の3校が参加し実施した。矢掛高校は昨年に続き、生徒自ら地元で話し手を決め実施した。そして、高梁川流域学校との連携により、古城池高校は水島コンビナート企業のOBへ、倉敷中央高校は地域課題を共有するために真鍋島の方へ聞き書きを実施した。また、岡山大学では、「聞き書き」を取り入れた地域活動も実施している。10年続けた事で、地域に必要な「聞き書き」の形となりつつあることは、とても望ましいことである。そして、何よりも、10年間継続できたのは、協力してくださった先生方、話し手の方々、地域のみなさん、聞き書きOG、そして、講師の澁澤寿一氏、スタッフの仲間のおかげだと心より感謝します。

また、話し手の方の中には亡くなられた方がおられます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

10年間の参加高校生215名話し手137名。

来年度、和気閑谷高校の創立350年記念事業の一環として、同校卒業生への「聞き書き」に取り組むことになった。以後継続して「聞き書き」を実施して行く予定である。

【第10回高校生によるまちの匠への「聞き書き」実施内容】

◆5月参加者公募

◆6月22日(土)「聞き書き」事前研修会&「森聞き」上映会



講師：澁澤寿一氏（NPO法人共存の森ネットワーク理事長）

会場：総社市立図書館3階展示室

矢掛高校、倉敷中央高校、古城池高校、聞き書き関係者、一般参加など約40名が参加

◆7月27日（土）、28日（日）「聞き書き」宿泊研修会「聞き書き」模擬体験ワークショップ

講師：前田芳男氏（岡山大学教授）
文章構成ワークショップ講師：室貴由輝氏（やかげ小中高こども連合共同代表）

会場：岡山県青年館、岡山大学中央図書館3階セミナールーム

矢掛高校、倉敷中央高校、古城池高校、チーム「結」（聞き書きOG）34名が参加

◆8月～9月インタビュー実施
◆9月～11月書き起こし&文章構成

◆12月21日（土）フォーラム開催

会場：岡山県立倉敷中央高等学校 記念館1階

【内容】第一部 振り返りワークショップ（講師：前田芳男氏）

第二部

・10年目を迎えてプロログ（事務局：森光康恵）

・トークセッション（聞き手：森光康恵）岡本美紀さん（鳥取大学4年生 聞き書きOG）尾崎浩子さん（水島おかみさん会会長 昨年度の話し手）室貴由輝さん（矢掛高校、岡山後

楽館高校在職中の担当教諭）

・2019「聞き書き」の発表

矢掛高等学校 矢掛地域での「聞き書き」
古城池高校 水島地域での「聞き書き」

古城池高校と地域連携の取り組み（水島家守舎Zena 古川明氏）

倉敷中央高校 真鍋島での取り組み（聞き書きプラス）「聞き書きプラス」について（一般社団法人代表坂ノ上博史氏）

岡山大学での「聞き書き」を活用した取り組み（前田芳男氏）

・全員参加でグループワーク（ファシリテーター：聞き書きOGチーム「結」原田珠実）

テーマ：今日の感想と2030年の展望

・まとめ（澁澤寿一氏）1月～3月成果物作品冊子作成

（担当理事 森光康恵）

〈連携事業〉

0歳児の発達支援に特化した地域拠点事業 ママぱれっと

ママぱれっとの視点

ゼロからはじまっている。

最初が肝心。
そう言いながら、**ヒト**としてのスタートアップ
つまり**0歳児**を育てることの
様々な課題に**社会は無関心**だったと思うのです。

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成 2018年度モデル事業、2019年度一般事業



学童期以降の「生きづらさ」につながる 「育ちにくさ・育てにくさ」の解消および軽減を目指す

1. 事業の位置づけ

「0歳児の発達支援に特化した地域拠点事業×ママぱれっと」は、2018年度独立行政法人福祉医療機構(WAM)社会福祉振興助成モデル事業として助成を受け、その事業評価では、100点中88点の高い評価を受けている。2019年度は一般事業として引き続き実施中の地域拠点事業である。

学童期以降の「生きづらさ」につながる「育ちにくさ・育てにくさ」の解消および軽減を目的に、3歳児以下、特に0歳児の発達課題を丁寧みる「親子の居場所づくり」を行うために、一般社団法人チカクが企画運営にあたった。

はじめての赤ちゃんとの暮らしで余裕のないママたちに伴走し、勇気づけ、応援していくために、現場の支援者自身が0歳児の心と体の発達に「視点」が持てるように、専門職と一緒にさまざまな側面からともに学び、親子に寄り添いながら生活圏でネットワークを形成するため、次の二つの事業を行った。

■事業A

親子に寄り添いながら支援者もいっしょに乳幼児の発達支援を学ぶ「ママと赤ちゃんの居場所」

■事業B

子育て支援にかかわる専門職・支援者向けスキルアップ研修およびネットワーク会議

事業Aでは、準備も含めて1年間、この事業のために「尽力いただいたアドバイザーのお二人に学び、スタッフ自身がそれぞれの役割や立ち位置を調整しながら、よりよい環境を作り出すことに努めた。先進的な事例に取り組み講師・アドバイザーを全国各地から招いた、事業Bでは、県内外の支援者、育休中の

専門職や支援者が学び、相互にネットワークを深めた。そして、同時期に開催されていたいくつかの事業にスタッフを派遣、事業A Bのプログラムを補完するへ連携講座」とらえた。

以上の事業について、事業全体の詳細は、左のQRコードのサイトからPDFファイルでダウンロード可能である。



2. 背景

■岡山県の支援級の多さ ……岡山県調べの自閉・情緒障がい特別支援学級在籍児童生徒数の推移(※)によると、学級の生徒数は10年間で3.6倍(H19年1137人↓H29年4088人)。現場でも、医療にも福祉にも引っかけからず、子育てに不安を持つ親からの相談が増えていることを感じる。

※第3次岡山県特別支援教育推進プラン
2018年3月、岡山県教育委員会資料

■親子のつながりごともの体の問題 ……インターネットでなんでも答えを見つけてしまい、実際に目の前にいることもとうまく関係が結べない保護者の存在、体の使い方に課題を持つ子ども存在が散見される。

■かゆいところに手が届かない制度設計 ……1歳半検診までの間、こどもへのかわりのアドバイスを受ける機会がなかったケースが散見される。制度として検診(1歳半)を待たなくてはいけない現状では、このことを強く意識し間を埋める支援サービスが必要である。

■高学歴、高齢化する出産 ……高齢出産で孤立しがちな母親、他地域からの流入世帯など、地域で子育て支援に助けを求めにくい親子がいる。

〈連携事業〉

高梁川マルシエ



互いに学びあい、地域の環境問題の解決のための行動が増加する好循環が創出

本年度の高梁川マルシエは、第17回おかやま県民文化祭のプログラムの一環として、流域での暮らしを考え、そこでの人と自然のつながりや人と人との支えあいを醸成する場として、マルシエを開催しました。流域のこだわりの食とモノづくり作家、音楽家、アーティストたちがコラボレーションして、自然と人が共生し、心豊かに美しく暮らすライフスタイルを提案し、以下の通り、様々な取組みを実施しました。

日時：2019年10月19日(土)・20日(日)の2日間

場所：国指定重要文化財大橋家住宅並びに阿知町界隈(阿知町通り(旧街道沿い))

出展者：24店舗

デザートタイム・クラシキ(オーガニックなカレールーとドリンク)、株式会社丸菱(プチ小町シリーズより、なた豆茶・ルイボス×はと麦茶・たんぼぼ茶他)、菓子工房小町(お洒落でカワイイ焼き菓子)、倉敷珈琲館(オリジナルブレンド珈琲)、七草農園(オーガニックなハイレベルな野菜)、倉敷中島屋(作家作品とオーガニックな料理)、旅農人ふぁーむ(備中の伝統炙り番茶)・Boulangerie MainMai(米粉パン)、Glass studio MIGAki(ガラスの鏡餅など)、内山直人(真鍮や銀を素材とした装身具)、HEHUMI(天然染料を用いた日々の生活衣や小物、染め直しオーダー+WS)、SIRUHA(手帳、バッグ、小物)・CLAY STUDIO GENN(普段使い出来る陶器、蜻蛉玉工房・MABO(とんぼ玉、手作りビーズの髪留め+WS)、BARREL FINE CLOTHING (BLENNHEIM)・

坂本織物有限会社(真田紐とその関連商品+WS)、1 a lice choice キャンドルアート+WS)、花好(ドライフラワーのガーランド、ハーバリウム+WS)、KKD Labo(宇宙人こけし、掛け時計等)、KOHJIC(オリジナル織物と革を使用したバック)、Tackle wood design(スタイリッシュな木の小物)、陶工房よし野(陶芸、灯Cass(ポリシリケートガラスのアクセサリー、カップ+WS)、dolly 木工房(箸、木工小物)

展示：3者

氏峯 麻里/イラストレーター(イラスト作品展示)、武才/銅版画家(銅版画作品展示)、井上準三/画家(絵画作品展示)

来場者数：2000人以上

(以上、事務局整理)

第六期以降ビジョン



高梁川流域学校～2月19日の鼎談～

大久保憲作・中村泰典・坂ノ上博史

「絶え間ない学びの流れの中で」

「目に見えない環境」

大久保 中村さんの家を、うち(倉敷木材株式会社)で建てたのが、1991(平成3)年でしたよね。建てた後は、中村さんと顔合わせないようにしていました。何か家のクレームでも言われると嫌だなと思って。

中村 そんなこと知らないから「会いたかったんだよ」と本町通りで呼び止めたのを覚えていますよ。たしか新聞にFM放送局ができる仕組みが書いてあった。

倉敷でやりたいなあ、と悶々としていたんです。大久保さんはアマチュア無線しているという話も聞いていたし、家のご縁もあったので。

1992(平成4)年、放送法の改正により、当時の郵政省が、市町村単位でも「コミュニティ放送局」を開設できるようにした。1995(平成7)年の阪神・淡路大震災後、コミュニティFM局が次々と開局した。

大久保 「そんなことなら早く言われえ」と、そこから準備をして1996(平成8)年に岡山県内初のFM局「エフエムくらしき」が開局しました。

中村 私は音楽が好きだから、ラジオDJをやりたいかった。音楽はレコードからCDに代わり、CDも売れなくなってきた頃でした。良い音楽をラジオができれば、みんなが聞けるという発想でした。

大久保 私は、HAM(アマチュア無線家)でしたから、国の制度としてラジオができてきたら、心が踊りました。倉敷青年会議所として「まちづくり」にも関わっていましたから、最適な手段だと感じましたね。

中村 「まちづくり」という意味で言えば、ラジオ局は「目に見えない環境」を倉敷に作れたと思いますね。

「川でつながる」

1992(平成4)年、「地球サミット(環境と開発に関する国際連合会議)」がリオ・デ・ジャネイロで開催。当時、12歳のセバン・カリス・スズキさんが環境問題について、「どうやって直すのかわからないものを、壊し続けるのはもうやめてください」とスピーチした。

1995(平成7)年の阪神・淡路大震災。日本のムードが何か変わり始めた。環境を話題にするようになり、市民活動が増えていった。

1997(平成9)年、京都で開かれたCOP3(第3回気候変動枠組条約締結国会議)。先進国による温室効果ガス排出削減目標を課す「京都議定書」が採択された。

2000(平成12)年、「高梁川流域ネットワーク」が設立。「建築士会」など47団体で立ち上げられた。

中村 私の地域との関わりは、「高梁川流域ネットワーク」がスタートだったかもしれないですね。準備事務局として、挨拶しました。大久保さんが閉会の挨拶をしていましたよ。

大久保 挨拶したのは覚えてないけど、中村さんに住宅だけではなくて、遊びも暮らしても、食べものも全部一緒にやろうと、声をかけられたのは覚えている。川でつながるという意識がこころ強くまりましたね。2003(平成15)年、「県産材を活用した家作り」運動をきっかけに「GREEN DAY」運動がス

ターゲット。

大久保 今でも課題ですが、「企業と地域社会との関わり」を議論し始めましたね。「GREEN DAY」のような活動に、企業の参画は珍しかったでしょう。年に1回だけの活動報告、アピールの場として開催。倉敷からスタートして、総社、高梁と高梁川を上っていきましたね。新見で開催できなかったのは残念ですが。

「ESDが始まった」

2005(平成17)年、愛知県で「愛・地球博(2005年日本国際博覧会)」が開催。

ESD(Education for Sustainable Development)「持続可能な開発のための教育」が脚光を浴びる。国連では、2014年までを「ESDの10年」と定めて推進。岡山市は同年、「ESDに関する地域の拠点RCCE」に認定された。

中村 岡山市がRCCEに決まった時、「倉敷市はなんでやらないの」と悔しく思いましたね。ESDが広まるようになると、頭の整理がしやすくなつたし、会話をする共通の道具を持った感覚がありましたね。

大久保 企業はこれまでもCSR(企業の社会的責任)として活動をしてきたけど、この頃からCSV(共通価値の創造)に変化していった。企業の本来の仕事を通して社会貢献をする。社長が旗振っているだけのCSRとは違い、社員が理解していないとCSVはできない。教育をベースとしたESDVが必要となってきたのだらうね。

2006(平成18)年、中村さんはNPO法人「倉敷町家トラスト」を設立。倉敷市伝統的建造物群

保存地区、また旧市街地に、長年放置されている町家を修復再生したいという思いからスタートした。

中村 ちょうど55歳の頃に、自分がすべきことがわかった。FMくらしき設立の時の標語が、「Think Globally, Act Locally」。倉敷町家トラストを始めて、「Act Locally」がやっと腑に落ちた。今度は、「目に見える環境」をどうやってつくるか。

目に見える形で、次の世代へ残すこと。高梁川流域の文化や伝統、暮らしぶりの基準となる「ものさし」とを作らなければと思う。「ものさし」がなければ、アイデンティティも持てず、生きづらいでしょう。

全国町家保存連盟の人たちと交流すると、「歴史的景観と文化的景観を残さない」と教えてもらう。美観地区や矢掛町、下津井など「歴史的景観」を残す努力はしている。同時に、暮らしや風習・風土のような地域ごとに違う「文化的景観」を残すことも重要だと感じる。

「備中は、円という風土」

大久保 我々の頃は、限界がない時代だった。常に変化する時代。高度成長期の経済は、右肩上がり。レコードはバカ売れし、住宅は年間190万戸も建った時代。経済の理屈でなんでもなると考えていた。

中村 若い人に聞いてみたい。2030年の幸福感はどこにあるのか。まちづくりの前に、それが何なのか示さないと進めないでしょう。

大久保 未来から逆算して今を考えるなら、どんな社会を求めめるのか。もちろん、経済

的な豊さは前提なのだろうけど、家族の幸せや心の豊かさ、働き方など、若い人が納得するところを知りたいね。我々とは違う感覚で考え、我々がいない次世代の世の中。

逆も言えると思うのだよ。変化を繰り返してきたからこそ、変わらなかったことに重要なポイントがある。それが、高梁川流域に残っている。古老が語る地域の歴史、文化。イベントをパツとやって、まちづくりができるわけがない。地域にあるゲネウス・ロキ(地霊)、潜んでいるものをよく知らずして、将来を語ることはできない。原点のような話だが、「温故知

新」を大切にしてほしい。やはり、「ものさし」が必要だね

中村 大久保さんは、「高梁川ファースト」でやってきましたよね

大久保 まずは倉敷ファースト、高梁川流域ファーストで取り組んできた。SDGsが入ってくるまでは、取り組みのそれぞれが分断して、つながっている感覚がなかった。個が中心で、家族、地域(町内)と広がり、最後はその円が地球になる。同心円に全てが広がるイメージ。

坂ノ上 神崎先生の「端的にいうならば、備中は「円という風土」という言葉が好きですね。「円」私は地元をあまり好きに



大久保 憲作



中村 泰典

なれず、大学で上京しました。東京はその頃、ネットバブルで、お金に溺れる人たちの中でまた嫌になり、地元に戻ってきました。今思えば居場所を探していたのでしょうか。どこで何をして、生きていくのか。町内のような小さなエリアでは息苦しい。縁のない場所も居心地が良くない。神崎先生の仰る「二円」のような範囲が私の居場所としてちょうど良く感じます。

「出会い」
2010(平成22)年、第25回国民文化祭岡山2010「あつ晴れ!岡山国文祭り」が開催。総合プロデューサーを神崎宣武さんが務めた。大原美術館の大原謙一郎さんから紹介頂いたのが出会だった。また、「聞き書き甲子園」主催のNPO法人「共存の森ネットワーク」の澁澤寿一さんとの出会いもあった。

大久保 神崎先生と継続して何かをやりたいと考えていた。神崎先生の師匠である民俗学者宮本常一さんは地元・周防大島で「周防大島郷土大学」を設立していた。神崎先生にも学校を倉敷で学校ができないだろうかと相談して、「備中私塾」を開校することになった。

2011(平成23)年、東日本大震災。日本全体が変わろうとしていた。

2012(平成24)年、「GREEN DAY」を発売させた「GREEN DAYS COLLEGE」を開校。2013(平成25)年、「高梁川流域連盟創設60周年」では、7市3町の首長サミットを行う。高梁川流域にも、連携と学びの進展があった。東京一極集中が進めば、全国896の自治体が消滅するとレポートした・増田寛也著「地方消滅」が2014(平成26)年出版。

2015(平成27)年、倉敷市が「地方中枢拠点都市」から「連携中枢都市」と改名され、5年間の新たなスタートを切った。

大久保 2010(平成22)年から、澁澤先生の聞き書き「備中でくらす匠(先人)」が始まり、2012(平成24)年から神崎先生の「備中私塾」が始まった。同塾は、後に高梁川流域学校内で行うことになり、神崎先生には、校長に就任頂いた。

「大原總一郎さんの高梁川流域」
1954(昭和29)年、「高梁川流域連盟」が創設。当時、高梁川流域には88の市町村があった。大原總一郎さんは、高梁川を「運命的共有物」として、地域の文化向上を目的として設立した。

中村 高梁川流域連盟の趣意書は「ユネスコ憲章前文に、」から始まる。終戦たった9年、7市3町でも大変なのに、どんな発想から高梁川流域連盟を創設することになったのか。

高梁川流域連盟趣意書(1章)
「ユネスコ憲章前文に、世界の平和は心の平和に

ある。各国の習慣風俗を知ることが戦争の悲劇から遠ざけると記されている。ユネスコの活動には色々な国際協力の計画がある。しかし我々は国際的な立場に立つだけでなく、国内的にもなすべき多くのことをもっている。ユネスコが国際間において果たすべく期待している事柄は、同時に国内の隣人同志がなさなければならぬことでもある」

大久保 總一郎さんは、1935(昭和10)年から新婚旅行でヨーロッパ・アメリカなどを訪れたそうです。ドイツ・ライン川の河畔に佇み、川と地域との関係を考えられた。森、文学、宗教、工業地帯。エッセンやデュッセルドルフの下流工業地帯から将来の水島を想像していたのでしょうか。

中村 資本主義が勃興している時代だったでしょうから、当然かもしれないですが、別の発想はなかったのでしょうかね。水島は瀬戸内最大の藻場であったと言われます。つまり、漁業で食べていける場所でもあった。

總一郎さんは、文化人でもありますが、経済人でもある。多くの先進的なことをやってきた。そう思えば、美観地区が残ったことは不思議ですね。大正時代には、鶴形山の北側はほとんど開発していきま

したから
大久保 壊したのもあったけど、作ったものが評価されている。農業・労働・社会問題・美術芸術・医療、全ての分野で研究し、書籍を残した。新たな歴史を、社会に合

中村 總一郎さんが作ってきたものは、高梁川流域の南側、倉敷を中心としたエリアに限られますね。財をなしたことや倉敷ファースト、大原家ファーストで語れば、素晴らしいことばかりだが、高梁川流域と考えるとそうとは言いえない。山田方谷や、備中松山城が中心であった時代の高梁川流域を語ることが大切でしょうね。昔から歴史や文化はあった。大原家を作った歴史だけではなく、元々持っていたものを学ぶ必要がある。神崎先生の出番ですね。

「学校という場所」

大久保 経済的なことしか考えられない世の中、次世代の幸せをどう示していくか。テクニクではなく、地域の教育を考えるべきですよ。倉敷宣言をもっと大切にしたい。

2016(平成28)年、伊勢志摩サミット(主要国首脳会議)に関連し、G7倉敷教育大臣会合が行われた。「倉敷宣言」は、1「社会的包摂」、2「共通の価値の尊重」、3「新しい時代に求められる資質・能力の育成」、4「教育の新たな役割を果たすための国際協働」。

大久保 SDGsを基本として、神崎先生のベータシクなものを現代に生かし、澁澤先生の地域の持つ方向性をいかにつなげていくかは課題ですね。根本には、「社会的共通資本」の考え方がるように思います。

社会的共通資本は、経済学者の宇沢弘文が提唱した。「ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力のある社会を安定的な持続を可能にする自然環境と社会装置のこと」。

坂ノ上 お金のあるところから教育、人材育成に出資していくようになりませんか。水島工業高校の「MEC I Aプロジェクト」ももっと企業が応援するような雰囲気になってほしい。

大久保 市民、行政、企業がSIBの活用も含めて、寄付文化の構築が必要だと思います。地域の人材を、地域でつくる。

「高梁川流域の更なる連携」

大久保 5年間続けてみて、7市3町の自治体間連携は難しいことがわかった。毎年5億円くらいの事業予算があるが、9割以上は倉敷市から発想している。

中村 役所の人の数がそもそも違いますからね。役所によっては10倍以上人の数が違うのに、バランス取れるはずですよ。

坂ノ上 どんなことなら7市3町で連携ができますか。

大久保 教育委員会が本気になれば、授業として「地域の時間」作れるでしょう。「高梁川エクスペレス」を中心とした観光をビジネスもできる。

中村 倉敷市役所に「高梁川流域課」をつくるべきですよ。各自治体から最低1人が常駐して、高梁川流域全ての自治体エリアを、自分のエリアだと考えられる人材を役所内でつくる。

大久保 以前、道州制の導入のような話題もありましたね。岡山県を解体して、備中郡のようなエリア制にする。難しい面もありますが、議論する必要がありますね。市役所と県民局の役割が重複しているところもあるで

しょう。

自治体レベルではなく、つながりとしてとらえ直す。新しい世代に期待したいところでもあります。

中村 高度に発展した東京のような街もあれば、素朴だけど地球と一緒に暮らす地域もある。高梁川流域は、「Always coming Home」でありたい。自分の故郷とも少し違う、いつでも帰れる場所。

(記録・編集・写真 松原龍之)

鼎談を終えて(坂ノ上)

高梁川流域の連携の取り組みを、大久保憲作さん、中村泰典さんに大いに語ってもらいました。自らの実践と生活に裏付けされた言葉の二つの精神を受け継ぎながら、新しく取り組みを切り開いていくためのヒントに溢れていました。高

梁川流域学校のプログラムの根幹の一つである、神崎宣武校長先生が講師をつとめる「備中志塾」の趣意書には、次のようにあります。

地方から日本に問い、地方から世界に問う、その学習の場が必要になります。そして、「普通のねうち」を備えた次代の人材を育てる場が必要になります。

かつて、そうでした。たとえば、山田方谷による「方谷塾」。阪谷朗廬による「桜溪塾」「興讓館」、福西志計子による「裁縫所」(順正女学校)など。備中地方には、その伝統もあるのです。

地域の学びの場を絶やすことがないよう、高梁川流域学校の取組みも更に展開していきたいと、この鼎談に思いを強くしました。



坂ノ上 博史

古代～近世まで続く、川の流れと一体になった文化、生活と、人々の『つながりやすさ』

山田方谷「方谷塾」、阪谷朗廬「桜溪塾」「興讓館」、福西志計子「縫製所(順正女学校)」など学びの伝統

『余の使命は教育にあり』 大原 孫三郎

- ・風習と生活
 - ・相互の援助及び相互の関心の精神
 - ・文化の広い普及と正義・自由・平和のための
人々の教育
- 「ユネスコ憲章」より

『備中は、まさに一円。「まとまりのよさ」。
時代も、土地も人も変わりゆく中で、変わらないもの
を模索し、次の世代につないでいきたい。』
神埼 宣武

『高梁川流域連盟趣意書』

大原 總一郎 (1954年)

高梁川流域連盟

流域自治体の教育委員会・商工会議所・商工会・金融機関等

『流域というエリアで考える
「流域思考」の運動=分担と協働の理念。
高梁川流域を川系地方のフロントランナーに』
大久保 憲作

『高梁川流域連携中枢都市圏構想』(2015年)

地域循環共生圏構築検討業務2016～18
(環境省)

森里川海+まちをつなぎ支える

流域コミュニティの形成

- ・2040年流域のあるべき暮らしの共有と実践
- ・2030年SDGsへのコミットメント

大学・企業・地域団体・自治体などと連携し、流域の自然や歴史・文化、及び産業を『地域教育』の教材として、持続的に提供すること。

2003年発足の「GREEN DAY」からの流れを組む当団体が、
2030年(SDGs達成目標年)に向けて取り組むビジョン

高梁川流域学校 ビジョン2030

自然資本の再生、維持

- ・森林間伐ボランティア
- ・家庭と地域をつなぐ環境教育
など

自然、歴史・文化、産業を知る

- ・備中志塾
- ・ジュニア備中志塾
- ・町家deクラス
- ・聞き書きプロジェクト
- ・邦楽の里プロジェクト
- ・水島コンビナートの進化 など

新しくて懐かしい、暮らしと働き方
「買うからつくるへ」

資源の再発見
「忘れ物を取りに行く」

自然、歴史・文化からインスパイアされる
「土地の夢を起こす」

信頼で未来を変える
「あたたかなお金」

なりわいづくり、仕事づくり

- ・高梁川マルシェ
- ・テレワーク&コワーキング
- ・高校生ビジネスプランコンテスト
- ・航空宇宙産業クラスター など

世代と地域をつなぎ、支え、担う

- ・高梁川ミーティング
- ・事業構想塾
- ・課題解決人材創出プログラム
- ・乳幼児支援の地域拠点事業 など

調和のとれた連携と協力
「平仄をあわせる」

お互いを認め、つながる
「風の人、土の人、水の人」

組織の課題

- 「ノウハウと人材のネットワーク形成」
→111人委員会
- 「資金面での体制強化」
→地域金融機関との連携、SIB等の活用
- 「中核人材の育成」
→次世代人材ネットワーク構築

- ・普及、啓発、情報発信
- ・テクノロジーの利活用
- ・インパクト評価

域外連携

- ・環境省との連携
- ・学生インターンシップ など

第六期以降ビジョン

1. 前提・背景

1-1-1. 大原孫三郎氏の思想と活動

大原孫三郎氏は、倉敷紡績の経営、倉敷中央病院や3つの科学研究所の設置を始め、数々の社会的事業を手掛けた。「余の使命は教育にあり」という基本的な考え方があり、まず最初に倉敷の教育を高めることに尽力する、次に高めた教育によって倉敷の道徳や意識などの精神的側面を改良する、そして最終的には倉敷からの影響を日本全国、さらには世界に及ぼす、という三段階を想定し、一人ひとりの人間や民衆の生活レベルにまで目を向けた経営や社会づくりを追求した。

1-1-2. 大原總一郎氏の思想と活動、ユネスコ憲章・高梁川流域連盟趣意書

孫三郎氏の幅広い活動は収斂、発展させられながら總一郎によって引き継がれていった。高梁川流域連盟の初代名誉会長であった總一郎氏は、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の委員として世界平和の理念を追い求めるとともに、地域の相互理解や連帯意識の必要性を感じていた。1954年、郷里を流れる高梁川を「運命的共有物」あるいは地域を結び付ける「紐帯」と捉え、高梁川流域連盟を創設。『高梁川流域連盟趣意書』は、ユネスコ憲

章にある「戦争は人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」に共鳴する一文から出発するが、それは、總一郎氏の思いそのものである。ユネスコが、人の心の中におこる戦争の萌芽を摘みとろうとしたように、高梁川流域連盟も、まず自らの近隣の町々との交友関係を深めることで、それぞれの特色を生かした平和的な発展を目指そうというものである。

1-1-3. 高梁川連携中枢都市圏構想

平成の大合併以降、人口減少に対応した地方の拠点形成のため、連携中枢都市圏が構想された。岡山県では平成の合併後27市町村となった。2013年(平成25年)10月には、流域7市3町の首長・議長が一堂に会する60周年記念サミットを開催し、今後の流域活性化のため、連携をより強固なものとし、まちづくりにかかる課題解決に共同で取り組むことを宣言した。高梁川流域連携では自治体間の連携が強まっていた。そして2014年、7市3町からなる高梁川流域連携中枢都市圏が設立された。

2. 高梁川流域学校のビジョン・コンセプト

2-1-1. 森里川海+街をつなぎ支える流域コミュニティの形成

平成15年(2003年)には、高梁川流域連盟の理念と2002年に開催されたヨハネスブルク・サミットの持続可能な開発に関する世界首脳会議(Development)のための10年(2005-2014年)提唱を受けて、流域の産学官民が連携して、高梁川の森と水と暮らしを考える啓発の日として「GREEN DAY」という暮らしに密着した環境保全活動を開始した。GREEN DAYは倉敷をはじめ、流域の総社市、高梁市などでイベント型の環境啓発事業を毎年継続してきた。

平成25年(2013年)「高梁川流域連盟」60周年記念サミットの際に流域7市3町の首長会議での流域連携強化が再確認され、それを基盤に翌年平成26年(2014年)に総務省「高梁川流域連携中枢都市圏」に採択された。これを契機に「GREEN DAY」事業は啓発活動から流域の学びを行う「高梁川流域学校」として検討され、「高梁川流域成長戦略ビジョン」の中で、「高次の都市機能の集積・強化」分野の事業として位置づけられ、平成27年6月「一般社団法人高梁川流域学校(以下、当法人)」がスタートし、高梁川流域連盟とその後GREEN DAY事業を継承するものとなった。

当法人にとっては、本事業はまさに時宜を得た好機と考えている。昭和29年から続く高梁川流域連盟の理念、平成

15年から続いたGREEN DAY事業での活動実績、高梁川流域成長戦略ビジョンに位置付けられた「高梁川流域学校」の設立、更にいま「森里川海」のつながりの中で、地域循環共生圏を構築するという目標は当法人の目指すものである。その実現のためのプロセスとして掲げられている3つの方向性(多様な主体によるプラットフォームづくり)「自立のための経済的な仕組みづくり」「人材育成」は、まさに当法人が持続可能な組織体(社会基盤)として地域に根付くために不可欠なものである。

「地域循環共生圏」とは、平成30年4月に閣議決定された国の第五次環境基本計画において、目指すべき姿の1つとして新たに掲げられたものであり、持続可能な社会のため、地域ごとに異なる資源が循環する社会を形成しつつ、近隣地域と共生・補完し、より広域的なネットワークや経済的なつながりを構築していく考え方である。その実質的な構築検討業務として、環境省より採択も受けて取り組んできた。

2-1-2. 2030年SDGsへのコミットメント・2040年流域のあるべき暮らしの共有と実践

持続可能な開発目標(SDGs)とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030

「アジェンダ」にて記載された、10年後の2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標のことである。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない(leave no one behind)」ことを誓っている。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル(普遍的)なものであり、高梁川流域においても、官民間わず取り組むべき目標であると認識している。これらの活動を積み重ねた延長線上に、20年後の2040年における流域のあるべき暮らしの共有と実践があると考えている。

2-3. 神崎校長・大久保代表理事の思い
当法人校長を務める神崎宣武氏は、平成24年に始まった当法人主催事業「備中志塾」において、備中地方の歴史と文化を学び、それを共有して次世代に伝える活動を行っている。神崎氏は、『備中は、まさに一円。「まとまりのよさ」がある。時代も、土地人も変わりゆく中で、変わらないものを模索し、次の世代につないでいきたい』と考えている。

当法人代表理事の大久保憲作氏は、『流域というエリアで考える「流域思考」の運動には、分担と協働の理念に基づいている必要がある。高梁川流域を川系地方のフロントランナーにしたい』と考えている。

こうした考え方を基盤として、当法人では、5つのコンセプトを掲げて活動している。

- (1) 風土を学び次世代に繋ぐ
- (2) 未来を創る仕事を興す
- (3) 先人に学び匠に習う
- (4) 節季を感じ旬を味わう
- (5) 自然を楽しみ多様性を知る

3. 組織の課題

当法人では、「大学・企業・地域団体・自治体などと連携し、流域の自然や歴史・文化、及び産業を『地域教育』の教材として、上記の5つのコンセプトに則った形で持続的に提供することをミッションの一つとしている。その中で、いくつが組織で取り組むべき課題や事柄を挙げていく。

3-1. ノウハウと人材のネットワーク形成
まず1つ目は、「ノウハウと人材のネットワーク形成」である。

高梁川の水系距離が11kmであることに鑑みて、高梁川流域で地域教育のノウハウを持っている人材11人を「11人委員会」としてのネットワーク化していこうと考えている。

3-2. 資金面での体制強化

次に、「資金面での体制強化」である。現在、高梁川流域の4信金と連携し、国と産(産業界)・官(自治体)・言(マスコミ)・民(国民)が取り組む地方創生の実現や高梁川流域圏の持続的発展に寄与することを目的として、定期預金「高梁川の恵み」を開設していただき、募集総額の0.03%を

当法人に寄贈いただく仕組みを構築している。

今後は、更に関係機関と連携を深め、ファンドの組成やSIB(Social Impact Bond)・サービス提供者のサービス提供費用について、民間資金提供者から資金調達を行い、行政と事前に合意した成果目標を達成できれば、後から行政が資金提供者へ成果に応じて報酬を支払うという仕組み)にも取り組んでいく必要がある。

3-3. 中核人材の育成・学校教育と地域教育との連携

3つ目は、「中核人材の育成」「学校教育と地域教育との連携」である。

地方では特に人口減少・高齢化が顕著であり、当法人でも中核人材を育成するべく、次世代の人材ネットワークを構築していく必要があるが、その際に、学校教育と地域教育との連携をどのように考え、取り組んでいけるのか、検討していく必要がある。

4. 取り組みテーマ・キーワード

当法人では、主催事業・協力事業という形で、複数の団体の持つプログラムを「地域教育」の教材として活用する体制を整えている。

そこには一定のテーマ性・統一感を持たせるよう分類することが可能でもあり、以下、5つのテーマごとに紹介する。

- (1) 自然、歴史・文化、産業を知る
 - ・ 備中志塾
 - ・ ジュニア備中志塾
 - ・ 町屋deクラス
 - ・ 聞き書きプロジェクト
 - ・ こども造形ひろば
 - ・ 邦楽の里プロジェクト など
- (2) なりわいづくり、仕事づくり
 - ・ 高梁川マルシェ
 - ・ テレワーク&コワーキング
 - ・ 高校生ビジネスプランコンテスト
 - ・ 航空宇宙産業クラスター など
- (3) 世代と地域をつなぎ、支え、担う
 - ・ 高梁川ミーツィング
 - ・ 事業構想塾
 - ・ 公共人材育成プログラム など
- (4) 自然資本の再生・維持
 - ・ 森林間伐ボランティア
 - ・ 自然の中での幼児教育
 - ・ ネイチャーゲーム
 - ・ フォレストジャンポリー など
- (5) 域外連携
 - ・ 環境省との連携
 - ・ 学生インターンシップ など

上記の具体的な取り組みから帰納的に浮かんでくる、当法人の大事にしている価値観を表すキーワードとしては、以下のものが挙げられる。

- ・新しく懐かしい、暮らしと働き方「買
うからつくるへ」
- ・調和のとれた連携と協力「平仄をあわせ
る」

- ・信頼で未来を変える「あたたかなお金」
- ・資源の再発見「忘れ物を取りに行く」
- ・自然、歴史・文化からインスパイアされる
「土地の夢を起す」

- ・お互いを認め、つながる「風の人、土の
人、水の人」

こうした価値観を大事にしながらも、温故知新で変化に対応していけるよう「普及、啓発、情報発信」「テクノロジーの活用」「インパクト評価」などの仕組みの構築及び高度化を行い、取り組みのプラットフォームを整備する必要がある。

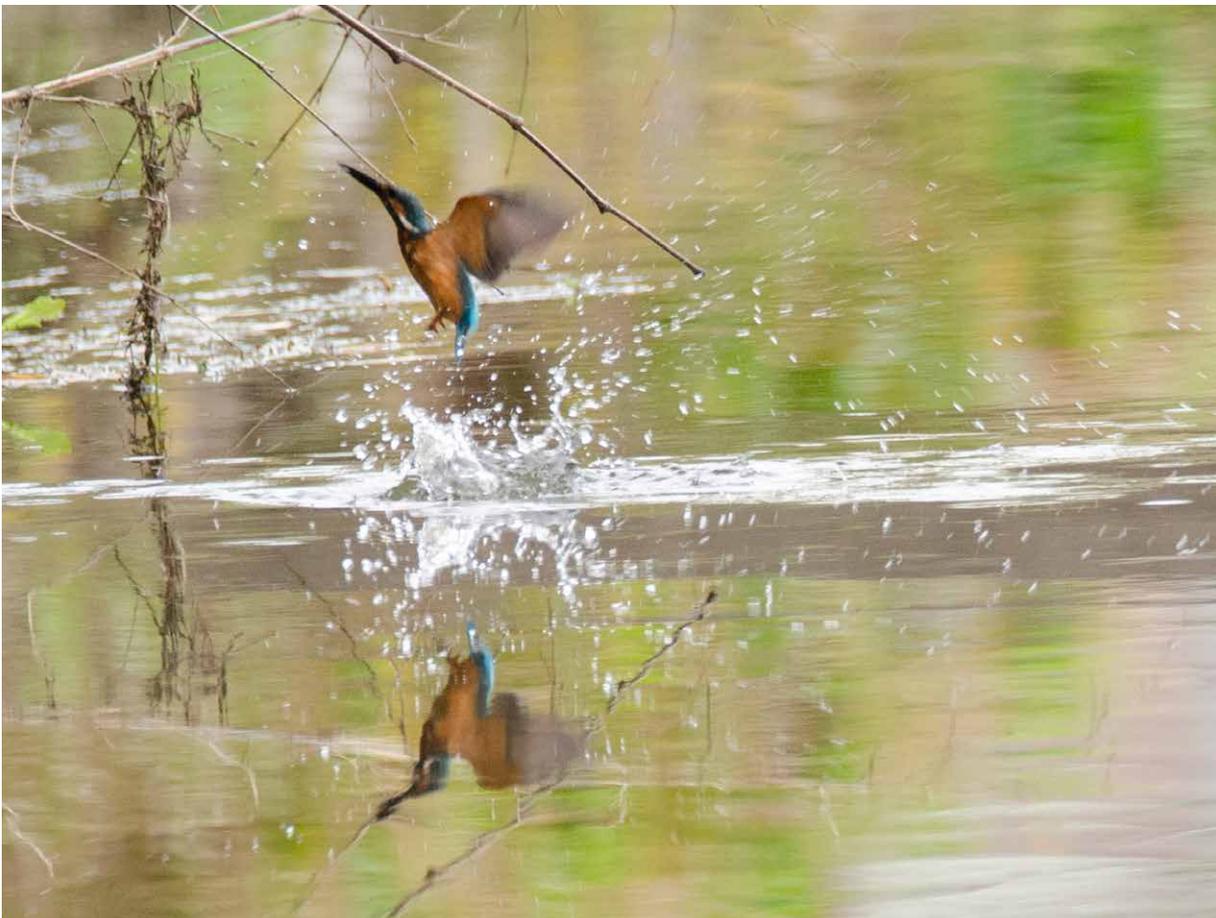
5. まとめ

以上、高梁川流域において引き継がれてきた思想や取り組みをベースに当法人が生まれてきたこと、今後、持続的な地域社会の実現のために当法人が取り組むべきことなどを「高梁川流域学校ビジョン2030」として提示・解説した。

次の5年間に向けて、解決すべき課題は多種多様ではあるが、関係者の皆様方と密に連携しながら、新しい体制で臨んでいければと考えている。

【参考文献】

- 『大原孫三郎―善意と戦略の経営者』（兼田麗子）
- 『「吉備」の歴史と伝統文化』（神崎宣武）
- 『大原總一郎における地域共生の思想―高梁川流域連盟から高梁川流域連連携中枢都市圏まで』（岩淵泰）



高梁川流域学校「111人委員会」募集趣意書

平成30年1月5日
(一社)高梁川流域学校 代表理事 大久保憲作

大原總一郎氏の高い理想を基に高梁川流域連盟が設立されて61年目、岡山県美星町出身の民俗学者神崎宣武先生を校長に迎え、高梁川流域学校が開校しました。平成27年6月のことです。神崎校長がいつも言われていること。

風土が文化を育んできたのです。風土は自然環境といいかえることができます。

文化とは、そこでの暮らし方のクセのようなものと言い換えてもよいでしょう。

私たちは、高梁川流域の風土、歴史や文化を学び、大事に次の世代に伝えなければならないのです。

高梁川流域学校は、地域からの「学び」をキーワードに流域各地で運動や行事を企画し実施して参りました。国や岡山県、倉敷市など高梁川流域連盟に所属する7市3町の市町はもとより、流域内外の心ある企業や団体そして大勢の個人に支えられ今に至っています。

どうすれば持続可能な運動として自立できるのか。暗中模索の3年でした。

志を持つ人がいて、その人々の志が、やがて地域の未来をかたち創ると信じています。そういう人々を生み出す仕組みのひとつが高梁川流域学校であれば望外の喜びです。

その為には志をもつ人々を周りで見守り支援する方々が必要です。

「111人委員会」とはそのような個人が集まった組織です。

高梁川流域は今もそして未来も、人として真に豊かな暮らしが実現できる場所だという思いを共有し、その方々と共に目指していきたいのです。

「111人委員会」の名称の由来

新見市花見山の源流から滔々と流れ、倉敷市の水島灘に至り瀬戸内海に注ぐ母なる川高梁川の総延長111キロメートルに因んでいます。

委員は総勢111人、高梁川流域学校の理念に賛同し、行事に参加する支援者であると同時に、厳しいご意見番であって欲しいと考えています。

高梁川流域学校「111人委員会」を募集しています

委員へのご入会・ご寄附のお願い

私たちの活動の趣旨に賛同し、支えて下さる賛助会員様、団体・個人の方からのご寄附を募集しています。ぜひ委員として、優れた地域教育プログラムを次世代につなぐ高梁川流域学校を応援してください。事務局あてにお名前・ご住所・お電話番号をお知らせいただければ、入会申込書をお送りいたします。

寄付金・助成金のお礼

平成31年度(令和元年度)、下記の皆さまには当団体の活動にご理解いただき、多大なる寄付金、助成金を頂きました。ここにそのご厚意に対し深く感謝の意を表します。

皆さまのご期待に応えるよう、高梁川流域学校の関係者一同は、益々精進していくつもりでおります。今後ともご指導よろしく願いいたします。

玉島信用金庫 様
吉備信用金庫 様
水島信用金庫 様
備北信用金庫 様
高梁川流域連盟 様

組織概要

校長	神崎 宣武	(民俗学者 旅の文化研究所所長)
顧問	澁澤 寿一	(認定特定非営利活動法人共存の森ネットワーク 理事長)
顧問	川嶋 直	(公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長)
顧問	大社 充	(特定非営利活動法人グローバルキャンパス 理事長)
顧問	山田 俊行	(トヨタ白川郷自然学校 学校長)
顧問	梶谷 俊介	(岡山トヨタ株式会社 代表取締役社長)
顧問	吉澤 保幸	(一般社団法人低炭素社会促進協会 代表理事)
代表理事	大久保 憲作	(倉敷木材株式会社 代表取締役会長)
理事	森光 康恵	(きび工房「結」 主宰)
理事	赤木 美子	(一般社団法人チカク 代表理事)
理事	中村 泰典	(特定非営利活動法人倉敷町家トラスト 代表理事)
理事	山下 武伺	(特定非営利活動法人フォレストフォーピープル岡山 理事長)
理事	坂ノ上 博史	(一般社団法人高梁川プレゼンターレ 代表理事)
理事	古川 明	(ミズシマ・パークマネジメント・ラボ 代表)
監事	塩飽 敏史	(公益財団法人水島地域環境再生財団 研究員)
監事	石原 達也	(特定非営利活動法人 岡山 NPO センター 代表理事)

事務局

住所	〒710-0046 岡山県倉敷市中央2丁目13-3
電話番号	090-4800-1110
FAX	086-691-2289
メールアドレス	takahashi.river1506@gmail.com
ウェブページ	http://lito.jp



高梁川流域学校

一般社団法人 高梁川流域学校

【事務局】〒710-0046 岡山県倉敷市中央2丁目13-3

TEL:090-4800-1110 FAX:086-691-2289

E-MAIL:takahashi.river1506@gmail.com WEB:http://liron.jp